

じふにばんしんろじー 二〇〇五年版



うるこアンソロジー 二〇〇五年版 目次

152年

足立和夫

3

戦争を純粋に楽しむための再教育プログラム。

あるいは、菓子袋の中のビーナッツがしゃべるのをやめるとなげ、隣の部屋に住んでいる男が、わたしの部屋の壁を激しく叩くのか？

男の代わりに、柿の種と称するおかきが代弁する。(大便ちゃうで。)

あらゆることに意味があると、あなたは思っていていいませんか？

しかして、または、しどろもどろに、舌を、したたたたたたた

世界が音楽のように美しくなれば

音楽のほうga美しくなるような気がするんやけど

どやろか？ まっ、じっさいのところ、わからんけどねえ。笑

風景の伝染病、恋人たちはジタバタしたはる。インド人。

想像のプラヤなんて、いやらしい。いつでも、つけてや。笑。

ぶひやひやひやひやひやひや。

田中宏輔

6

深川忘年会始末

—— 解醒子飲食番外

倉田良成

286

トンボ鉛筆株式会社へのクレーム

有働薫

289

塀の上の首 三井喬子

291

ミッドナイト談合

T I S A T O

294

苦い舌の先が歯茎に触れる

水島英己

297

深く恋して 富澤守治

303

百日紅 海埜今日子

308

相聞・あいぎこえ

桐田真輔・高田昭子

311

152年

足立和夫

粕谷栄市氏に捧げます

百五十年以上も会社に通勤していると
行き先もいろいろだ

向かう方向も正反対になることは

しばしば起こることである

朝の電車の顔ぶれも見知らない

ほとんど亡くなってしまうた

吊革の歴史を憶えているのは

もうわたしだけだろう

こんなに老いた者を

まだ会社は首を切らない

理由を知ることはないが

ただ働けばいいのだ

暗黒の街に住み

日々が流れていくと

顔が真っ白になる

それはサラリーマンの証しである

引き換えに

自分が誰であつたか

わからなくなる

それはどうでもいいことなのだ

必要もないことだから

会社の動きが生活である

わたしの心には歴史もなく

じつは永遠もないのである

のっぺらぼうのゆで卵みたいなものである

給料はわたしを通りすぎていき

銀行で紙幣たちが

瞬時に何かに変身していく

百五十年以上も時間を経ると

それらの出来事は

どうでもいいことなのだ

人生を超えたことなのだ

会社はわたしの人生を買っているのだから

買われている人生が何であるのか

わたしは知ることはない

ただ暗黒の街への懐かしさだけが

百五十年以上も生き延びている

それだけは確かなことだ

戦争を純粹に楽しむための再教育プログラム。

あるいは、菓子袋の中のピーナッツがしゃべるのをやめるとなぜ、隣の部屋に住んでいる男が、わたしの部屋の壁を激しく叩くのか？

男の代わりに、柿の種と称するおかきが代弁する。（大便ちゃうで。）

あらゆることに意味があると、あなたは思っていないまいませんか？

しかして、または、しどろもどろに、舌を、したたたたたたた

た
世界が音楽のように美しくなれば

音楽のほうが美しくなくなるような気がするんやけどどやるか？ まっ、じっさいのところ、わからんけどねえ。

笑

バリ、行ったことない。中身は、どううでもええ。

風景の伝染病、恋人たちはジタバタしたはる。インド人。
想像のブラヤなんて、いやらしい。いつでも、つけてや。
笑。
ぶひやひやひやひやひやひやひやひや。
笑。

ロング・ヴァージョン、でえーす。笑)

田中宏輔

ぼくの金魚鉢になってくれる？

草原の

上の

ビチグソ。

しかもクリスチャン。笑

それでいいのかもね。

そだね。

行けなさそうな顔してる。

道路の上の赤い円錐がジヤマだ。

百の赤い円錐。

スイ。

薔薇窓の新しい原稿を、喫茶店の窓側のテーブルの上にひろげて

喫茶店で原稿のチェックをしたりすることがあつて

窓側の席に坐つて原稿を眺めている姿を見させている自分を

とても素敵だと思ふ自分がいて、月に何回か

窓の外からいちばん素敵に見える坐り方をするところがある。

きょう、そうしていると

そっくり同じ姿をした男女のカップルが

ぼくのとなりになつた。

ふたりは手錠で繋がれていて

テーブルの上に手を置くと

店の音楽に混じつて

手錠の金属部分がガラスのテーブルの上に置かれる音がした。

ガチャガチャと、ガチャガチャと

ふたりは、ブレンド、と声を揃えて注文し

手錠をかけていない方の手で

テーブルの上を叩きながら

モールス信号で話しはじめた。

ぼくの友だちが、自衛隊の潜水艦に乗っていて

諜報部に所属していたから、ぼくもモールス信号を

知っていたから、ふたりが話をしている内容がわかった。

ふたりのリズムミカルな会話が進む。

二人、三人

一人、五人

七人、四人

って。

窓の外を通る人間の数を数えては

これは、いま、この街でここから愛し合っているひとの数。

これは、いま、この街で、介護している老人に熱湯をかけていたぶっている介護士の数。

これは、いま、この街で、まさに自動車に轢かれようとしているひとの数。

だとか、いろんな状況にあるひとたちの数をあげていった。

ふたりの注文したホット・コーヒーが運ばれてきた。

ぼくは、自分の書いている原稿より面白いふたりの会話に聞き耳を立てた。

取り立ててハンサムでもなく

取り立てて美人でもなく

平凡を絵に描いたようなふたりだったけれど

ともかくにも幸せそうなふたりだった。

ぼくにも、そんな会話ができる相手がいればなって、思った。

思っ、ふたりの手錠を持ち上げると

ガシャンツツ

テーブルの上にぶつけてやった。

ふたりはにっこり笑って、ぼくを見送ってくれた。

原稿を抱えて、ドアから出て行くぼくの後ろ姿を。

店員がその後ろから追いかけてくるぼくの後ろ姿を。

理想の相手を求めて顔を上げて歩いてくぼくの後ろ姿を。

マドル。マドラー。マドラスト。子供たちは、頭をマドラーのようにぐるぐる回している。マドラーは、肩の上でぐるぐる回っている。ぐちゃぐちゃと、血と肉と骨をこねくりまわしている。そうして、子供たちは、真つ赤な金魚たちを、首と肩の隙間から、びちゃびちゃと床の上に落としている。子供たちの足がぐちゃぐちゃと踏みつぶした、子供たちの真つ赤な金魚たちの肉片を、病室の窓の外から、ぼくの目が見つめている。学生時代に、三条河原町に、「ビッグ・ボーイ」という名前のジャズ喫茶があった。ぼくは毎日のように通っていた。だいたい、いつも、ホット・コーヒーを飲んでいた。そのホット・コーヒーの入っていたコーヒーカップは、普通の喫茶店で出すホット・コーヒーの量の3倍くらいの量のホット・コーヒーが入るものだったから、とても大きくて重たかった。その白い重たい大きなコーヒーカップでホット・コーヒーを飲みながら、いつものように、友だちの退屈な話を聞いていた。突然、ぼくの身体が立ち上がり、ぼくの手と口しよに、その白い重たい大きなコーヒーカップが、友だちの頭の上に振り下ろされた。友だちの頭が割れて、血まみれのぼくは病院に連れて行かれた。べつにだれでもよかつたのだけれど、って言うと、看護婦に頬をぶたれた。窓の外からぼくの目は、首から上のなごぼくの身体が病室のベッドの上で本を読んでいるのを見つめていた。ぼくは、「ゴペー」と「ページ」の間に身を潜ませていた神の姿をさがしていた。いったい、自我はどこ

にあるのだろうか。ページをめくる指の先に自我があると考える。いや、違う。違うな。右の手の人差し指の先にあるに違いない。単に、普段の、普通の、あるがままの、右の手の人差し指の先にあると考える。ママは、人のことを指で差してはだめだよ、って言うていた。と、右の手の人差し指の先が記憶をたぐる。でもさあ、人のことを差すから人差し指って言うんじゃないかよ、って、右の手の人差し指の先は考える。自我は互いに直交する4本の直線でできている。1本の直線からでもなく、互いに直交する2本の直線からでもなく、1点において互いに直交する3本の直線からでもなく、1点において互いに直交する4本の直線からできている。と、右の手の人差し指の先が考える。ぼくの目は、窓の外から、それを見ようとして、ぐるぐる回る。病室のなかで、4本の直線がぐるぐる回る。右の手の人差し指以外のぼくの指がばらばらにちぎれる。子供たちの首と肩の隙間から、真っ赤な金魚たちがびちゃびちゃあふれ出る。子供たちは、頭をマドラーのようにぐるぐる回している。マドラーは、肩の上でぐるぐる回っている。ぐちゃぐちゃと、血と肉と骨をこねくりまわしている。そうして、子供たちは、真っ赤な金魚たちを、首と肩の隙間から、びちゃびちゃと床の上に落としている。それでよいと、右の手の人差し指の先は考えている。45ページと46ページの間を潜ませていた神もまた、それでよいと考えている。ああ、どうか、世界中の不幸という不幸が、ぼくの右

の手の人差し指の先に集まりますように！

神は文字の上にいるのではない。

文字と文字の間なのね。

だから

神は文字に呪縛されて

ぎゅうぎゅう

もうもう

牛さん、飴さん、たいへん

ぼく。

携帯で神に信号を発する。

携帯を神に向けてはっしん。

って

ぎゃって

投げつけてやる。

ぼくは頭をどんだん壁にぶつけて

神さまは頭が痛いって

ぼくは頭から知を流しつづける

血だ

友だちのフリをする。

あのと

看護婦はぼくのことを殴った

じゃなく

しばいた。

ぼくの病室は全身で泣いて

ぼくの涙が悔しくて

スリッパを口にくわえて

びゅんびゅん泣いていた。

ああ、神さまは、ぼくがほんとうに悲しんでいるのを見て

夕方になると

金魚の群れが空にいっぱい泳いでた。

神さまはぼくの肩を抱いて

ぼくをあやしてくれた。

ぼくは全身を硬直させて

スリッパで床を叩いて

看護婦がぼくの腕に

ぼくの血中金魚度が低いから

ぼくに金魚注射した。

金魚は自我をもつて

ぼくの血液の中を泳ぎ回る。

ていうか、それって

自我注射？

自我注射。

自我んだ。

違った。

ウガンダ。

どのページも

ぼくの自我にまみれて　ぐっちより。

ちようちより。

きょうは休日だというのに

17ページと18ページの間に（プツ）

学生時代

河原町に

ビッグボーイというジャズ喫茶があつて

毎日のように

通つてた。

コノ話つて前にしたかな。

ジージャン

ジーンズ

おっきなカップで

ホットばかし飲んでた。

友だちとしゃべつてると

憂鬱になつて

友だちの頭をその大きなコーヒークップで割つた。

ぼくは救急車で病院に運ばれて

いやだな

だれでもよかったのにつて

そういったら、看護婦さんは、ぼくの頬を思い切り叩いて

ぼくの目は、ぼくの学生時代のぼくを見て

ポロポロ

涙が金魚のように落っこちた。

涙が病院のベッドの下を

ぼくが寝ている間も

泳いでいた。

ぼくの目は

金魚と同じ高さにあつて

病室の窓を見上げてた空の端に

昼間なのに月が出ていた。

きよとんとしたぼくの息が

病室の隣のひとを

ペラペラとめくっては

どのページに神が潜んでいるのか
探した。

きつと

17ページと18ページの間だな。(プツ)
揃えるところが、バカ

いや、

ぼく。書き出そうとして

一年前からだということに気がついた。

思考は腫瘍である。

わたしの頭脳ができることの一つに

他者の思考の刷り込みがある。

まあ、テレパシーのようなものであるが

わたしの頭に痛みがある。

皮膚に走る電氣的な痛みとつながっているようである。

きゆうはとてつもなく痛い。

いままで頭の横のところ

右側だけだったのに

きょうは頭の後ろから頭の頂にかけて

すっかり痛みに

痛みそのものになっているのだ。

さあ、首を折り曲げて

これから金魚注射をしますからね。

あなたの血中金魚濃度が低くて

さあ、はやく首を折り曲げて

はやくしないと、あなたの血管が金魚不足でひからびていきますよ。

あさ、パパ注射したばかりじゃないか。

きのうは、ママ注射したし

ぐれてやる。

はぐれてやる。

かくれてやる。

おがくれる。

あがくれる。

いってくれる。

うがくれる。

えがくれる。

街は金魚に暮れている。

つねに神は徘徊する、わたしの死んだ指たちの間で。

もくもくと読書する姿が見える。

そのときにもまた

ぼくの死んだ指の間で神が徘徊しているのだ。

ぼくはもくもくと読書している。

図書館で

ぼくはひとりですべて読書する少年だったのだ。

四年生ぐらいだったかな。

ぼくは

なんで地球が自転するのかわからないって本に書かれてあるのにびっくりして

本にもわからないことがあるのだと

不思議に思っ

ほかの本の方を向くと

書棚と書棚の間から

死んだパパそっくりの神さまが

ぼくの方を見てるのに気がついた。

すると

ぼくの身体は硬直して

ぼくは気を失っていた。

ぼくが気を失っていたあいだも

ぼくの死んだ指の間を神は徘徊していた。

地球がなんで自転しているのかって

それからも不思議に思っていたけど

だれもわからないのか

ぼくがこの話をして

神さまが、ぼくの指の間から

ぼくのことを見張っている。

ぼくの死んだ指は神さまに濡れて

血まみれだった。

美しい音楽が

ぼくの気分を盛り上げる。

十歳ぐらいのぼくの

かわいらしい

死んだ指たち。

百の千切れたぼくの指たちよ。

あふれ出る洪水の死んだ指たちが

ぼくのキーボードを叩く。

死んだ指たちの勝利だ。

頭から這い出てくる。パパやママたちだ。

苦しみのとげ

死の罨だ。

憎しみの宴が

ぼくの頭のなかで催されている。

きょうは一晩中かもしれない。

額が割れて

死んだ金魚たちがあふれ出てきそうだ。

頭が痛い。

割れて 死んだパパやママがあふれ出てくるのだ。

ぼくは プリン。

彼女は アフタヌーン。

ぼくの脳髄は直線の金魚である。

直線の金魚が、ぼくの自我である。

自我と脳髄は違くと直線の金魚がパクパク。

神経質な鼻がクンクン。

神経質な人特有の山河。

酸が出ている。

鼻がクンクン。

華麗臭じゃないの。

加齢臭ね。

美しいひどい臭いの口がパクパク。

セイオン。

ぼくの星の運命は

百万光年の

光に隠されている。

光に隠されている。

いいフレーズだな。

影で日向ぼく。

ぼっこじゃなくて

ぼくがいいかな。

日向ぼく。

で、

影で日向ぼっこ。

ぼっこって

でも、なんだろう。

ぼくの脳髓は 百のぼくである。

じゃなく、

ぼっこ。

じゃなく、

死ね。

自我の形を想像する。する。すれ。せよ。

自我の形は 直線である。

自我の形は 直交する二つの直線からなっている。

自我の形は 直交する三本の直線からなっている。

自我の形は 直交する四本の直線からなっている。

それらの直線は どれひとつとして 同じものではない。

ぼくの頭がぐるぐるまわる。

ぼくの視線がぐるぐる考える。

四本の直線は無理かも。

どうにかして、四本の直交する直線を考えようとする

ていうか

考えたことにする

ぼくのキーボードがここそそと逃げ出そうとする。

ぼくの指が　こそこそと　ぼくから離れようとする。
死ね。

あるいは　自我は　血まみれの　カーテンにあると考えたまえ
あるいは

トア・エ・

モア。

ふふん。

オレンジの空に青い風車だったね。

ピンク・フロイドだったね。

わが自我の狂風が

わが廃墟に吹きわたる。

遠いところなど、どこにもない。

空間的配置にさわる。

肩のこりは

一等賞。

むさし

思い出すことはほとんど詩にしてみましたから

あとは、パパやママの記憶を

ぼくの自我から引き出して

ぼくの遺伝の廃墟を語る。

かわいらしい

金魚たちを

踏みつける。

ゴールデンタイムの

テレビ番組で

キャスターが ぼくを指差す。

ああ、指をぼくに向けたらいけないのに。

ママがそう言ってただろ！

ぼくに指を向けちゃいけないって。

詩ね。

じゃない。

詩ね。

じゃない。

シネ。

じゃない。

市ね。

じゃない。

死ね。

リンゴも赤いし、金魚も赤いわ。

リンゴでできた金魚。

金魚でできたリンゴ。

金ゴとリン魚。

リンゴの切断面が

金魚の直線になっている。

死んでね、ぼくの指たち。

ルイルイ

楽しげに浮かび漂う ぼくの死んだ指たち

神の指は 血まみれの幸運に 浸り

ぼくの頭のキンギョを回す。

トラベル

フンガー

血まみれの指が

ぼくを作り直す。

治してね。

血まみれのプールに静かに

ゴーゴーと

泳ぎ回る

死んだぼくの金魚たち。

ぼくの頭のなかをぐるぐるまわる

倒壊した。パパの死体や

崩れ落ちたママの死体たち。

なかよく踊りまちょ。

神は 死んだパパやママの廃墟を 徘徊する。

リスニン・トウー・ザ・ミュージック！

ぼくの廃墟で 死んだパパやママが手に手をとって 踊る。

陽の光を遮断していたカーテンが

森の木々を背景に 踊る。

カーテンのすそでは

死んだパパやママが泳いでる。

血まみれの森だ。

カティン！

手のしびれが金魚の指のはじまりになるまで。

自我が 指の先にあると 想像する。

ぼくの自我が 右の人差し指の先にあると 想像する。

ぼくは ひだりのゆび 先に 自我が あるとは 思いたくないな。

左手で うんこを ふくから。

あ、うんこをふいた神を ふくから。

右の指

右の人差し指に

自我があると思う。

自我をひとに向けるといけないと ママが言った。

ママは、金魚をぼくの頭に流しているくせに。

重たい頭は キンギョが パクパク死んでるからだぞ。

指が動きにくいのは

自我が パクパクしてるからだぞ。

存在理由を人差し指が考える。

人を指すから人差し指って言うのに

なんで、人を指したらダメなんだよ。

指の先のぼくの自我が考える。

なんでなんやろね。

世界中の不幸が、ぼくの指先に集まりますように。

さあ、この指、とまれ。

ギリギリ、ぎこちなく動く

ぼくの指たち。

ああ、たくさんの指に群がる、ぼくの自我たち。

もしも、きのうの自我が 今日の人差し指で

きょうの昼に指さしたコンビニの太った店員に

ぼくの自我がうつってたとしたら

ぼくはあの太った店員の指になっていたのだ。

きのうもそのコンビニの太った店員だったのだから

きょうのぼくの指も、その太った店員の指だったに違いない。

ね、ママ

ぼくは、ぼくを指差したのだから

怒らないでね。

メ！

ぼくのママ、出てきちや、ダメ。

ダン・シモンズの

「夜更けのエントロピー」をまだ読んでなかったことを思い出した。

「愛死」を読んでたから、いいかなって思って、ほっぽらかしてただけど

やっぱ読もうかな。

新しい diionysos

10月8日に印刷できる予定。

ぼくもしつかり働きに行かなければ！

ハヤカワ文庫の 幻想と怪奇 3巻

読み終わってみて、ちと、あれかなって思った。

創元のゾンビのアンソロジ―の面白さにくらべたら

ちと、かな。

と。

通勤のときと

部屋で読むのとは別々にしてるんだけど

さつき

鳥が現実感を失う

とメモして

すると

ぼくは、アニメのサザエさんの書割の

堀の横を歩いていた。

マイケル・スワンウィックの「大潮の道」のような作品が読みたい。

「ヒーザン」読めばいいかな。

これから、耳のクリーニング。

ブラッドベリの『死人使い』というのを読んだ。

いろいろなところに引き合いに出される作品なので

内容は知ってたけれど（内容の一部だろ！）

やっぱりちとエグイ。

耳遺体

耳遺体

事故抹殺

自己抹殺

あ

劣等意識の織り上げる

耳遺体。

耳痛い

だけれど

耳遺体

の方が美しい。

ブルー・ベルベットや

ぼくの陽の埋葬が思い出される。

花遺体。

じゃない。

鼻遺体は、うつくしくないね。

鼻より耳の方が

部分として美しいということなのかな。

瞳のきれいな死体というのもいいけど

眼球遺体

の方が、音が美しい。

見た目も

顔面が眼球になっていて

身体も眼球になっていて

ただひとつの

眼球遺体。

いや、耳遺体のほうがいいな。

腕遺体。

足遺体。

でん部遺体。

ばらばらの飛蝗が美しいわけは

以前に詩に書いたことがあったけど

あ

理由は書いてないか。

小刻みに震える

耳遺体。

ハチドリのように

ピキピキ

メイク・ユー・シツク！

愛は僕らをひきよせる。

と書いたのは

ジョン・ダン

と言っても

高松雄一さんの訳で

わずらわしいバカでも

わかる詩句だけど

愛する対象が人間たちを動かす

って

言ったのは

ヴァレリーね。

って

佐藤昭夫さんの訳だけど。

ぼくの知性は天邪鬼で

いつでも

その反対物を想起させる。

あらゆる非存在が

存在を想起させるように。

通勤電車のなかで思いついた。

昨年(2007)の2月8日と書いてある。

詩は思い出す。

かつて、自分が、ひとに必要とされていたことを。

詩は思い出す。

たくさんのひとたちのこころを慰めてきたことを。

詩は思い出す。

そのたくさんのひとたちが

やがて小説や音楽や映画に慰めを見出したことを。

しかし、それでも

詩は思い出す。

ごくわずかなひとだけど

詩に慰めを求めるひとたちがいることを。

って。

うろうん。

バカみたいなメモだすなあ。

小説のつづき。

月で発見された異星人の宇宙船のなかから

発見された植物の種子。

2004年4月15日のメモ。
薬。

そういえば、きょうは薬の効き目が朝も持続していて
ふらふらしていたらしい。

ひとに指摘された。

自分ではまっすぐ歩いてるつもりなんだけど。

仕方ないなあ。

歳かな。

たしかに肉体的には

年寄りじゃ。

ふがふが。

ふがあ

河童の姉妹が花火を見上げてる

ひまわりのそば 洗濯物がよく乾く

夏休み 半分ちびけた色鉛筆

どの猿も 胸に手をあて 夏木マリ

鼻水で 縄とびビュンビュン ヒキガエル

子ら帰る プールのにおいで着て

まな落ちて 手ぬぐい落ちる 夏の浜

わが声と偽る蝉の抜け殻

恋人と氷さく音 並び待つ

フアツ

夏枯れの甕の底には猫の骨

これも漱石じや

わがコインも 蝉の亡骸のごと落つ

違った

わが恋も蝉の亡骸のごと落つ

わがコインもなけなしのポケットごと落つ

チツチツチ

俳句の会に出る。

1997年の4月から夏にかけて

アハツ 漱石ちゃん

ばかばかしい

話にもならない

情けない

って

歳寄りは思わないのね。

会費10000円は

回避したかった。

チツ

蟻ほどの大きさのひと つぶしたし

人ほどの大きさの蟻 つぶしたり

この微妙な感じがわかんないのね。

歳寄り連中には。

なんとなく 蟻ほどに 人 つぶしたし

ヒヒヒ

けり

けれ

けら

けらけらけら

けっ

まなつぶる きみの重たさ ハイ 飛んで

小さきまなに 蟻の 蟻ひく

わが傷は これといいし蟻 蟻をひく

自分と出会って 蟻の顔が迷っている

あれ

前にも書いたかな？

メモ捨てようつと。

ギャピツ

あり地獄ひとまにあこ みごもりぬ

蟻地獄一室に吾児身ごもりぬ

キラッ

蟻の顔

ピカル

ちひろちゃん

チュ

Soul Bar で Junior の Mama Used Said
Dip の新しい原稿が、ようやくできた。

こんどのも、ぼくの『マールボロ。』に関するものなんだけど
またつぎのつぎの

Dip

にまで、つづきそう。

『マールボロ。』については、まだまだ書きつくせなくて
長くつづきそう。

おとつい、えいちゃんのところに、赤ちゃんが生まれた。

えいちゃんそっくりの、かわいい赤ちゃんだった。

つぎの Dip は

森鷗外。

ひさびさに日本の作家をもとに書きます。

斉藤茂吉以来かな。

問を待つ答え。

問いかけられもしないのに

答えがぼつんと

たたずんでいる。

はじめに解答ありき。

解答は、問あれ、と言った。

すると、問があった。

彼らが入ったラブホテルの

シャワーの湯のあたたかさが

わたしの肌となり

湯しぶきのきらめきの一粒一粒が

わたしの目となる。

こんどの *poie* の『マールボロ。』論からの一節です。

ヴェルレーヌという詩人について

かつて書いたことがあります

ヴェルレーヌの飲み干した

アブサン酒の、ただのひとしずくも

ぼくの舌は味わったことがなかったのだけれど

ようやく味わえるような気になった。

もちろん、アブサン酒なんて飲んじやいないけど。

笑

ようやく原稿ができた。

もう一度見直しして脱稿しよう。

そうして

ぼくは、ぼくの恋人に会いに行こう。

ぶさいくオニオン。

風景が振り返る。

あっちゃんブリゲ。

手で払うと

ピシヤリ

と

へなっつて

父親が

壁によろける。

手を伸ばすと

ぴしゃり

と

手で払う。

あんまり遠くて

聞こえないではないか。

ヒヤッコイ

ヒヤッコイ

三千世界の

ニワトリの鳴き声が

わたしの蜂の巣のなかで

コダマする。

時速何百キロだっけ。

ホオオオオオオ

つて。

キチキチ

キチキチ

ぼくの鳩の巢のなかで

ぼくのハートの素のなかで

ニワトリの足だけが

ヒヤッコイ

ヒヤッコイ

ニードル

セレゲー

エーナフ。

ああ

ヒヤッコイ

ヒヤッコイ

ぼくの

声も

指も

耳も

父親たちの死骸たちも

イチジク、ミミズク、三度のおかわり

会いたいね。

目

合わしたいね。

きつと

カット

ね。

見返りに

よいと

巻け。

やっぱり、声で、聞くノラ

ノーラ

きみが出て行った訳は

訳がわからん。

ぼくは

いつまでたっても

自立できない

カーステレオ。

年季の入ったホーキです。

毎朝

毎朝

いつまでたっても

ぼくは

高校生で

授業中に居眠りしてた

ダイダラボッチ

ひーとりぼっち

そげなこと言われても

訳、わがんねえ

杉の木立の

夕暮れに

ぼくたちの

記憶を埋めて

すれ違っていくのさ。

風と

風のように。

そしたら

記憶は渦巻いて

くるくる回ってるのさ。

ひよろん

ひよろん

って

生きてく糧に

アドバラン

眺めよろし

マジ決め

マジ切れ

も一度

シテイの風は

雲より

ケバイ。

そしたら

しっかりと生きていけよ、美貌のマロニーよ。

ハツケ

ヨイヨイ

よいと

負け。

すばらしく詩神に満ちた

廃墟の

上で

ぼくは

霧となつて
佇んでいる。
ただ
澄んでいる。
色のない
ビニルを
本の表紙に
カヴァーにして
錦
葵。
ボタンダウンが
よく臭う
ぼくの欠けた
左の指の影かな。
年に平均
5, 6本かな。

印刷所で

落ちる指は。

ヒロくんはのたまわった。

お父さんが

労災関係の弁護士で

そんなこと言ってた。

アハッ。

なつかしい声が過ぎてく

ぼくの

かわりばんこの

小枝。

腕の

皮膚におしつけて

呪文をとなえる。

ツバキの木だったかなあ。

こするといいにおいがした。

したかな。

たぶん、

こするといいにおいがした。

ヒロくんの定食は

焼肉だった。

チゲだっておいしいよ。

キムチだっておいしいよ。

かわりばんこの

声だ。

ぼくは

ヒロくんの声になって

坐ってる。

十年

むかしの

ゴハン屋さんで。

この腕の

痕。

父親たちの死骸を分け合う、ぼくのたくさんの指たち。

まるで見てきたような嘘を

溜める。

ん？

貯める・

んんん。

矯める？

矯めるじゃー

はた迷惑な電話に邪魔されて

おまえが、なんで、わたしの指の間に

父親たちの死骸をはさんで

出て行くのか。

ひっきりなしに

ぼくの指の間から

ぼくの父親たちの死骸が生えてくる。

無駄な

手足のように

によきによき

ぼくのしなやかな

やさしい

指の間から

不要な

父親たちの死骸が生えてくる。

ぼくの無数の指が

父親たちの悲鳴に

みるみるしぼんでいく。

透明なセロファンだけが

ぼくの指の先に

教えてくれる。

生きているのは

死んだ父親たちだけだと。

ああ、

ぼくは生きているんじゃないかったんだ。

ぼくの指は生きているんじゃないかったんだ。

ときどき、ぼくの指たちは

ぼくの父親たちが死んでいることを忘れるからって

そんなに生えてくることないじゃないか！

ああ、

ぼくの指の間から

死んだ父親たちが生えてくる！

こんなにも

こんなにも

はあ？

ああ！

こんなにも

こんなにも

満ちてくる

ぼくの
指たちも
死んだ
父親たちの
死骸たちも。
思いの
ほかに
さあ、
ここに
おいで、
ぼくの
指たち
死んだ
父親たちの
死骸も
ああ

こんなにも

こんなにも

ぼくは、ぼくに満ちあふれて。

戦線今日今日。

戦線今日今日

あの根、ぬの根

カンポの

木の

根。

五秒だけ待って言ったろ。

ガチャン。

辺境の詩人たちは考える。

火のついた棒を飲み込んで。

十字架にまつわりついた

花の精たちが

逆さになって

落っこちていく。

つぎつぎと。

まるで

蛾の産卵だ。

(ひやはっ、見たことねえけどよ。)

うろうん、なんでハシダスガコ？

二つ、四つ

ずれてんだよね。

花の精たちのせいではないんだけどね。

万里の頂上の

どこか知らないけど

その壁に

いっしょうけんめい自分の

名前を彫っている

生まれ変わったら

何になりたい？

うとうん、

べつに。

花の精でもいいし

産卵する蛾でもいいよ。

あ、

べつに

産卵しない蛾でも。

刷毛。

じゃなくて

吐け！

だれにも見送るのだ。

そんなに離れているわけでもないのに

さびしいフリをするのだ。

さつとマントを翻して

そうして

金田一探偵するのだ。

謀略と

暴力は違うと

涙が

出てきてとまらない。

みんな命を落としていくのだ。

さつと来て

さつと去るのだ。

まるで金田一探偵のように。

ぼくに見えるのは

マントを翻す

歴史の姿だけで

生きている人間は

みんな

マントに巻き込まれていく

風に過ぎない。

だれにも見送るのだ。

あらゆる歴史が

ミリ秒以下で

扇風機。

ごまんと浴びる

大衆浴場。

湯船から

指を突き出して

ハイ

カモン！

そんなに遠くでは

詩人の伝記が好き。

詩人の詩より好きかも。

詩人の出発もいいけど

詩人のお仕舞いの方がいいかな。

不幸には

とりわけ

耳を澄ますのだ。

蜂の巣のなかの声が。

ぼくのなかの

声

耳を澄ますのだ。

ああ、

聞こえないではないか。

そんなに遠く離れていては

ぼくのなかの

声

耳を済ます。

ああ、聞こえないではないか。

ぼくは

ぼくの

右後ろの

頭に

だれかがいるようで

気配がするのだ。

ああ、聞こえないではないか。

ただ

痛みだけを送るのはやめてほしい。

ぼくの

耳が沈黙してるのは

ぼくの

声が

離れているからか。

ああ、

聞こえないではないか。

そんなに遠く離れていては。

ぼくの

頭の

右後ろにいるヤツ
はやく出て来い！

ブーン

と。

ぼくの

頭

痛いの

はやく

出て来い！

って

ぼくの耳は

いつまでも沈黙し

沈黙する

声が

ぼくを聞いている。

ぼくの

頭の
右後ろの
姿を。
ペロリ
と
むけて
いく
ぼくの
痛い
ぼくの
頭の
痛い
蜂の
巢の
なかの

エ 声

もう詩を書く人間は、ぼく一人だけだ。笑

ぼくの口の中は、たくさんのお母さんでいっぱいだ。

抜いても、抜いても生えてくる

ぼくのお母さん。

ぼくは黄ばんだパンツの

筋道にそって歩く

その夜

黄ばんだパンツは

捨てられた。

若いミイラが

包帯を貸してくれるっていつて

自分の包帯をくるくる

くるくる

はずしていった。

若竹刈り

たけのこかい！

木の芽がうまい

ほんまやな、せつないな

ポンドでくつつくけた

クソババアたち

ビルの屋上から

数珠つなぎの

だいぶ

だいぶ

死んだわ

だいぶつさん

合唱

あ

合掌

だす。

舞姫は、ぼくひとり。

ファミリアアルバムを分け合う。

せりふを覚えるのが

一苦勞。

バナナの花がきれいだったね。

ふわふわになる

浮き輪に喜んで

走り回ってた

棺のなかに入ったおばあちゃんを

なんで、だれも写真にとらなかつたんだろう？

おばあちゃんは、とつてもきれいだったのに。

生きてるときより、ずっときれいだったよ。

ぼくのおばあちゃんの手をひっぱって

ぼくのおばあちゃんを棺のなかに入れたのは

ぼくだった。

ばいばい

って、してみたかったから。

いつも、おばあちゃんに

ばいばいって

してたけど、

ほんとのばいばいがしたかったんだ。

ふふわになる

おばあちゃん。

二段か、三段。

土間の上にこぼれた

おかゆの湯気が

ぼくの唇の先に

触れる。

ぼくは口を

ぱくぱく

どうして、舞姫は

ぼくがひとりで

金魚と遊んでたことを知ってるんだろう？

ひゃっこい

ひゃっこい

ピチッ。

ピチッ。

もしも、自分が光だつてことを知っていたら、バカだね、ともたん。

まつげの上を

波に

寄せては

返し

返しては

寄せて

ゴッコさせる。

まつげの上に

潮の泡が

ぷかりぷかり

ぼくは

まつげの上の

波の照り返しに

微笑み返し

ポテトチップスばかりたべて

体重が戻ってるじゃん！

せつかく神経衰弱で

10キロ以上やせたのにいいいい

まつげの上に

波に遊んでもらって

ぼんやり

ぼくは本を読んでる。

いくらページをめくっても

物語は進まない。

寄せては返し

返しては

寄せる

ぼくのまつげの上で

波たちが

泡だらけになって

戯れる。

きつと忘れてるんじゃないかな。

ページはきちんとして

めくっていかないよ

物語が進まないってこと。

ページをめくってはもとに戻す

ぼくのまつげの上の波たち

いまほど

ぼくが、憂鬱であつたためしはない。

足の裏に力が入らない。

波は

まつげの上で

さわさわ

さわさわ

光の数珠が、ああ、おいちかったねえ。まいまいつぶれ！

人間の老いと

光の老いを

食べ始める。

純粋な栄光と

不純な縁故を

食べる。

人間の栄光の及ばない

不純な光が

書き出していくと

東京だった。

幾枚ものスケッチが

食べ始めた。

ごめんね、ともひろ。

きみは、ぼくのおもちやだった。

幾枚ものスケッチに描かれた

光は

不純な栄光だった。

言葉にしてみれば

それは光に阻害された

たんなる影道の

土の

かたまりにすぎないのだけれど。

ごめんね。

ともちゃん。

声は届かないね。

みんな死んじやったもん。

もしも、ぼくが

言い出さなかつたら

て

思うと

バカだね。

ともたん。

もしも

自分が食べてるのが

光だと

知っていたら

あんとき

根が食べ出したら、病気なの根、ぬの根、あの根。ペコッ
自分が食べている羊が

食べている草が

食べている土が

食べている光が

おいちいと感じる

まいまいつぶれ！

ウサギおいしい。カマボコ姫。チュッ
歯科医は

思い切り力を込めて

ぼくの口の中の

母親をひっこぬいた。

父親は

パンチで砕いてから、ひっこぬいた。

咳をすると

ぼくじやないと思うんだけど

咳の音が

ぼくの顔の前でした。

咳の音は

実感をもって

ぼくの顔の前でしたんだけど

だんだん、ぼくは怖くなる。

ぼくの瞼の

左目の引き攣りを見たか。

見た者は、見たものそのものになる。
んじやなかったかな。

引き攣れよ。

おまえも。

左の目が

びくびく。

左の目をおさえて

びくびく。

引き連れよ。

お前も。

びくびく。

びりびり。

びくびく。

びりびり。

ひーっ！

宮古島。

単身赴任。

ひとりでさびしい。

ぼくが欲しているのは

きみの千切れた指の光景だ。

ぼくの窓にかかった

たくさんの指に力がこもる。

アルデバラン。

じつと見つめてる。

おまえの瞼も

引き連れよ。

ただしい死体の運び方

あるいは

妊婦のための

新しい拷問方法。

かつては

チベットでは

夫を裏切った妻たちを拷問して殺したという。

まあ、インドでは

生きたままフライパンで焼いたっていうから

そんなに珍しいことではないのかもしれないけれど。

こうして、ぼくがクレーラーのかかった部屋で

友だちがくれたチーズケーキをほおばりながら

音楽を聴きながら

心にふに書いてる時間に

指を切断されたり

腹を裂かれて

腸を引きずり出されたりして

拷問されて苦しんでる人もいるんだろうけど。

かわいそうだけど

知らないひとのことだから

知らない。

前にNHKの番組で

指が机の上にぼろぼろ

ぼろぼろ

血まみれの指が

指人形。

ぼくの右の人差し指はピーターで

ぼくの左手の人差し指は狼だった。

ソルト

そーると

ソウルの街を

電車で移動。

おまえは東大をすべって

ドロップアウトして

そのまま何年も遊びたおして

ソウルの町を電車で移動。

耳で聴いているのは

ずっと

ジャズ。

ただしい死体の運び方。

あるいは

郵便で死体を送りつける方法について
学習する。

切手で払うのも大きい。

小さい。

デカメロン。

ただしく死体と添い寝する方法。

このほうが、お前にふさわしい。

おいしいチーズケーキだった。

きょう、いちばんの感動だった。

ま・ん・ぞ・くう。

わかった。わかった。わかった。

まだ、眠れないの。

か。

ぼくの瞼の引き攣りは

少女たちが産み捨てた

老婆たちのせいだった。

ぼくは庭に出て

老婆たちを滅ぼすために

除草剤をまいてやった。

老婆たちは

ぼくの顔面をかざる

引き攣りだった。

ぼくは老婆たちに感謝して過ごさなければならぬ。

その感謝のしるしに

ときおり

老婆となって

三途の川を渡る。

ときおり

三途の川から戻ってくる。

ぼくの顔面の引き攣りは

老婆たちの盛り場だ。

老婆たちは

川の水をかけあいながら

ピーチクパーチク

ぐしょぐしょだ。

河原町の街角から

老婆たちが

ぴょんぴょん跳ねながらこちらに向かってくる。

お好みのヴァージョンだ。

ぼくの暗殺者たちは狙った獲物をはずさない。

か。

わかった。

いまようやくわかったのだ。

わかっただ。

少女と老婆をつなぐ

中心軸から文庫本三冊ぶんの距離にいる

ぼくの顔面は蛆蠅のたかる死骸だ。

神は疲れきった身体を持ち上げて

ぼくに手を伸ばした。

ぼくは、その手を振り払うと、神の胸をドンと突いてこういった。

立ち上がれって言われるまで、立ち上がったらダメじゃん。

神さまは、ぼくの手に突かれて、よろよろと

そのまま疲れきった身体を座席にうずめて

のたり、くたり。

か。

標準的なタイプではあった。

座席のシートと比較して

とくべつおいしそうでも、まずそうでもなかった。

ただ、しよっぱい。

やっぱり。

でっぱり。

でずっぱり。

神の顔にも蛆蠅が

老婆たちの卵を産みつける。

老婆たちは、少女となって卵から孵り

雛たちは

クツクツと笑うリンゴだ。

どんな医学百科事典にも載っていないことだけど。

植物事典には載ってる。

気がする。

か。

おいしい。しょっぱい。

か。

ぼくの顔面をゲートにして

たくさんの少女と老婆が出入りする。

ぼくの顔面の引き彎りだ。

キキ、

金魚！

アロハ

おえっ

もうじきたくさんの

少女たちの死体が生まれてくる。

くちびるのうちがわに、びしびし生えたコケモモだ。

目を見開きながら

少女たちの死体が生まれてくる。

口のなかは、死んだ少女たちでいっぱいになって

ぼくは、少女たちの声で

ヒトリデ、ピーチクパーチク。

最初の話はスラッグスの這い跡で

夜の濡れた顔だった。

そういえば、円山公園の公衆トイレで首を吊って死んだ男と

御所で首を吊って死んだ男が同一人物だという話は

事実だった。

男は二度も死ねたのだ。

ぼくの身体の節々が痛いのは、なかなかならない。

こんど病院にいくけど

呪術の本も買ってこよう。

痛みをうつつす呪術がたしかにあつたはずだ。

ぴりぴり。

ぴかーって、光線中で狙い撃ち！

一リットルの冷水を寝る前に飲んだら

ゲリになっちやった。

ぐわんと。

横になって寝ていても、少女の死体たちが

ぼくの口のなかでピーチクパーチク。

ぴりぴり。

ぴかーっと。

たしか、首を吊った犬の苦しむ顔だった。

紫色の舌を口からたれさせて

白い泡をぶくぶくと

徒然草。

小さいものはかわいらしいと書いてあった。

小さな少女の死はかわいらしい。

ってこと？

ぼくの口のなかの死体たちがピー地区パー地区。

ふふ。

大きな棺に入った大きな死体もかわいらしい。

筆箱くらいの大きさの少女たちの死体がびっしり

ぼくの口のなかに生えそろっているのだ。

ようやく、ぼくにもわかってきたのだ。

ぼくのことだ。

今晚も、寝る前に冷水を一リットル。

けっ。

あらまほしっ、きっ

ケルンのよかマンボウ

ふと思いついたんだけど

帽子のしたで

顔だけが回転してるほうが面白い。

アイスクリーム片手にね。

アイスクリームは

やっぱり

じよっぱり

しょうが焼き。

春先に食べた王将のしょうが焼き定食は

おいちかった。

ぼく、マールボロウでしよう？

話の途中で邪魔すんなよ。

ぼく、マールボロウだから

デジカメのまえで

思わずポーズきめちゃった。

クリアクリーン。

歯磨きの仕方が悪くって

死刑！

ガキデカのマンガは、いまなかなか見つからない。
わかんない。

井伊直弼。

って、スペリング、これでいいって？

いいって。

いてて。

ぼく、井伊直弼

ちゃうねん

あつすけだよん。

って。

鋼の月は

ぎらぎら。

リトル・セントバーナード

シヨウ

人生は

演劇以上に演劇だ。

って

べつに

言ってるか、どうかなんて

言わない。

ちいいいいいい

てるけどね。

ケツ。

プフッ。

ケルンのよかマンボウ。

ぼーくの

ちって

る

けー

天空のはげ頭

ナチス鉄かぶと製の

はげカツラが、くるくる回転する。

頭皮にこすれて、血まみれギヤーだった。

ふにふに。

空飛ぶ円盤だ！

このあいだ、サインを見た。

登場人物は、みんな霊媒だった。

十年前に賀茂川のほとりで

無数の円盤が空をおおうようにして飛んでるのを

友だちと眺めたことがあった。

友だちは、とても怖がっていたけど

ぼくは怖くなかった。

友だちは、ぼくに

円盤見て、びっくりせいへんの？

って言ってたけど。

ぼくは、

こんど、ふたりに飲みに行きましようって言われたほうが
びっくりだった。

どうしてるんだらう。

ぼくの口のなかには、少女たちの死んだ声がつまってるっていうのに
ぼくの耳のなかでは、その青年の声が叫びつづけてるんだ。

だから、インテリはいやなんやって

ああ、これは違う声か。

違う声もうれしい。

ぼくの瞼の引き攣りは

ヒヒ

うっしてあげるね。

神経ぴりぴり。

血まみれ

ゲー

て

うっしてあげるね。

プ

しゅてるん。

知ってるん？

ユダヤの黄色い星。

麻酔なしの生体解剖だつて。

写真だったけど

思い出しただけで

ピリピリ

ケラケラ

ケセラセラー。

あい・うおん・ちゅー

あらまほしい、きいいいい

ぼくの詩を読んで死ねます。

ぼくの詩を読んで死ねます。

か。

ひねもす、のたりくたり。

ぼくの詩を読んで死ねます。

か。

ひねもすいすい

水兵さんが根っこ買って

寝ッ転がって

ぐでんぐでん。

中心軸から、およそ文庫本3冊程度ぶん幅で

拡張しています。

か。

ホルモンのバランスだと思う。

か。

まだ睡眠薬が効かない。

か。

相変わらず役に立たない神さまは

電車の

なかで

ひねもす、のたりくたり。
か。

ぼくは、疲れきった手を
吊革のわっかに通して

くたくたの神を
見下ろしていた。

か。

おろもい。

か。

飽きた。

か。

腰が痛くなつて
言いたくなつて

神は

あつくんの手を

わっかからはずして

レールの上に置きました。

キュルルルルルって

手首の上を

電車が通りすぎていくと

わっかのなかから

無数の歓声が上がりました。

日が変わり

気が変わり

神は

新しいろうそくを

あつくんの頭の上に置いて

火をつけました。

なんべん死ぬねん！

か。

なんべんもだっち。

(ひつこい、轍。)

顔面の中央が

お風呂場の水になっていて

動かないでいると

ぼくの詩を読んで死ねます。

か。

死ね！

痩せた手で

つかんだ

コーヒークップは

劫火だった。

十年前の手紙のなかで

突き刺さった言葉に

立ち止まる。

文字の上にしやがみこんで

そいつの息の根を

掘り返す。

銃の沈黙は

違った

十の沈黙は

うるさいとか

笑

沈黙の三乗は

もう沈黙とは単位が違うから

沈黙じゃないとか

笑

なんとかかんとか

ヤリタさんと

荒木くんと

くつちやべり。

ええ

ええ

それなら

ドン・タコス。

おいちかったね。

いや、タコスは食べなかつた。

タコライス食べたね。

おいちかったね。

ハイシーン。

だっけ。

おいちかった。

サーモンも

おいちかった。

火の説教。

痩せた手のなかの

コーヒーカープは

劫火。

生のサーモンもカルパッチオ！

みやぐろかなって言って

ドン・タコス。

ぱりぱりの

ジャコ・サラダは

ぐんばつだった。笑

40過ぎたおっさんは

ぐしょぐしょだった。

いや、くしゃくしゃかな。

これから

ささやかな

葬儀がある。

目のひきつり。

だんだん。

欲しいものは手に入れた。

押し殺した悲鳴と

残忍な悦び。

庭に植えた少女たちが
つぎつぎと死んでいく。

除草剤をまいた

痩せた手のなかの

あたたかいコーヒークップは

順番が違うつちいいいいいい

あつくんの頭の上のろうそくが燃えている。

死んだ魚のように

顔面の筋肉は硬直して

無数の蛆^がが

卵を産みつけていく。

膿をひねり出すようにして

あつくんは卵を産んだ。

大統領夫人が突然マイクを向けられて

こけた。

こけたら、財布が出てきた。

財布はマイケルの顔に当たって

砕けた。

マイケルの顔が、笑。

笑えよ。

ブフツ。

あつくんの頭の上で燃えているろうそくの火は

しょっぱい。

そろそろ眠る頃だ。

睡眠薬を飲んで寝る。

噛み砕け！

顔面に産みつけられた

蛆蠅たちの卵を孵す。

あつくんの頭の上で燃えているろうそくの火は

しょっぱい。

(ひつこい、しょっぱさだ。笑)

前の職場で親しかったドイツ語の先生は

バーテンダーをしていたことがあると言ってた。

バーテンダーは、昼間は

玉突きバイトをしていた

青年がいた。

ぼくが下鴨にいたところだ。

といつても、ぼくが26、7才のところだ。

九州から来たという

青年は二十歳だった。

こんど、ふたりつきりで飲みましようって言われて

顔面から微笑みが這い出してきて

ぼろぼろとこぼれ落ちていった。

まるで

蛆蠅の糞のように。

笑えよ。

で

とうもろこし頭の

彼は

ぼくのなかで

一つの声となつて

迸り出ちやつたつてこと。

詩ね。

へへ、

死ね！

さあ、気ちがいになりなさい・異色作家短篇集7

いま、いちばんほしい本かな。

フレデリック・ブラウン。

ね。

で、

けふは、人間がいつぱい。

に

299ページに

ぜんぶ食べちゃっちゃだめよ

って

あつて

ちやつちやつ

っ

て。

ママ。

ママ。

ママ。

と打つ。

あるいは、

だめよ

だめよ

だめよ

と

何ページにもわたって

だんだん

文字を

大きくしていつて
で

乾燥した

お母さんが

出てきたところで

とめる。

釘抜きなんて

生まれて

まだ10回も使ったことがないな。

お母さんは

縮んで

釘のように

柱の真ん中に突き刺さってたから

釘抜きで抜く。

可能性の問題ではない。

現実の厚さは

薄さは、と言ってもよいが

ぼろぼろになつた

筆の勢いだ。

美しい直線が

わたしの顔を貫くようになっていく。

滅んでもいい。

あらゆる大きさの直線でできた

コヒ。

塑形は

でき

バケツで

頭から血を流した

話を書こうと思うんだけど

実話だから

話っていつでも

ただ

バケツって

言われたから

バケツをほったただけなんだけど

手がすべって

パパは頭から血を流した。

うううん。

なんで

蟹、われと戯れて。

ひさびさに

鞍馬口のオフによる。

ジュール・ベルヌ・コレクションの

海底二万哩があった。

きれいな絵。

500円。

だけど、背が少し破けてるので、惜しみながらも

買わず。

ブヒッ。

そのかわり

河出書房の日本文学全集3冊買った。

一冊105円。

重たかった。

河出新刊ニュースがすごい。

もう何十年も前の女優の

若いころの写真がすごい。

これがほしくて買ったとも言える。笑

でも、何冊持つてるんだろう。

全集の詩のアンソロジー。

このあいだの連休は

詩を書くつもりだったけど、書けなかった。

蟹と戯れる

啄木

ではなく

ぼく

でもなく

ママ。

を

思ふ。

ママは

蟹の

巨大なハサミにまたがって

ビビー

シャキシャキと

おいしいご飯だよ。

ったく、ぼく。

カンニングの竹山みたいな

怒鳴り声で

帰り道

信号を待っていると

いや、信号が近づいてくるわけじゃなく

信号が変わる

じゃなく

信号の色が

じゃなく

電灯のつく場所が変わるのを待ってただけど

信号機が

カンカンなつてた

きのことじゃなく

きょうね。

啄木が

ぼくの死体と戯れる。

さわさわとぎらつく

たくさんのぼくの死体を

啄木が

波のように

足の甲に

さわっていくのだ。

啄木は

ぼくの死後硬直で

カンカンになった

カンカン鳴ってたのは

きのうの夜更けだ。

二倍の大きさにふくらんだ

ぼくの腐乱死体だ。

だから行った。

波のように

啄木の足元に

ゴロンゴロン横たわる

ぼくの死体たち。

蟹、われと戯れる。

いたく、静かな

いけにえの食卓。

ぼくぼく。

ったく、ぼく。

と

啄木。

ふがあ

子供のとき、足の甲を車にひかれたことがあるけど、ぜんぜん大丈夫だった。

白浜で生きているタコを捕まえたら、手からみついできて、手がタコの毒にしびれた。

部員が誰も来ないので机に水滴を落として水滴に映る理科教室を見つめていた。

カナブンを捕まえて糸をつけて振り回して飛ばしていたら、首が千切れてしまった。

これチョコレートだよって弟に言われて、チョコフレークみたいな犬の糞を手渡されたことがある。

教科書に田植えって出てきたから、植田くんのいる方をちらっと見やった。

親と海に行つて、溺れたフリをしても来てくれなかったので、溺れたフリをやめた。

週に何回くらいオナニーするのってきかれたら、必ず少な目に答えていた。

バスケで、友だちの顔にボールをあてたら、前歯がぜんぶ落ちた、さし歯だった。裏庭でおばあちゃんがニワトリの首を手斧でぶった切っていた、めちゃくちゃ怖かった。高校へは、よく曲がる電車で通った。80度がいちばん楽しい。その中で一度、手紙を手渡されたことがある。

親友のタカヒロ君は消防車の模型を持ってオナニーすることをやめなかった。

おばあちゃんが来てくれなかったので、弁当袋で同級生の頭を殴った後、手のひらを合わせて半分に分られたクラスメイトと砂浜に行った。

先生に言われた通りに親を動かすと、食パン、バナナ、ジュース、チョコレートが見える。硬貨もだ。幼稚園の頃、丸ごと母親を賭けてのゲームが流行った。

友だちの顔にボールをあてたら、生きている長い長い教頭先生が出てきた。

手からみついてきて、噛まれたけど、ぜんぜん大丈夫だった。

前歯がぜんぶ落ちた小林秀雄みたいなフィリピン・ハーフのその人は、溺れたフリをして朝礼台に立っていた。

車にひかれた四歳の子供がボルトの入った曲がらない脚に糸をつけてタコを飛ばしていたら、

88地区の陶器の犬の首が割れてしまった。

お絵かきの時間に剃刀で眉毛を剃られた植田くんのいる方をちらっと見やった。

カラフルに塗られたクゲヌマ君が他界する二週間前、めちやくちゃ怖かった。

五年から六年になる。バスケで、部員が誰も来ないので、春に転校した。

ちよっとしたギャグのつもりで井上君を振り回したら、ホクロだらけのスプーンが入っていた。

二人で海に行つて、チョコフレークみたいな運ちゃん同士はたまに共食いをした。

オートン軍団の来襲！

この世から、わたしがいなくなることを考えるのは、それほど困難なことでも怖ろしいことでもないのだけれど

なぜ愛するひとが、この世からいなくなることが怖ろしいことなのか？

一つ一つの事物・形象が、他のさまざまな事物や形象を引き連れてやってくるからだろう。

無数の切り子面を見せるのだ。

まことに

人生は

一行の

ボードレールである。

ぼくの腕 目をつむるきみの重たさよ

狒狒、非存在たることに気づく、わっしやあなあ

木歩のことは以前に

書いたことがある。

木歩の写真を見ると思い出す。

関東大震災の日に

えいじくんが

火炎のなかで、教授に怒鳴られて

ぼくの部屋で

雪合戦。

手袋わざと忘れて。

もう来いひんからな。

ストレンジネス。

ボタンッ！

大鴉がぐるりと振り向き

アツチャキチャキー

愛するものたちの間でもっともよく見られる衝動に
愛するものを滅ぼしたいという気持ちがある。

関東大震災の日に

えいじくんが

ぼくと雪合戦。

ヘッセなら

存在の秘密というだろう。

2001年1月10日の日記から抜粋。

夜、ヤリタさんから電話。

靴下のこと。

わたしの地方では、たんたんていうの思い出したの。

靴下をプレゼントしたときには気づかなかったのだけど。

とのこと。

客観的偶然ですね。

と

ぼく。

いま考えると

客観的偶然ではなかったけど、
たんたん。

ね。

ぼくのちっぼけな思い出だな。

ちっぼけなぼくの思い出ね。笑

金魚が残らず金魚だなんて

だれが言った！

原文に当たれ

I loved the picture.

べるで・くるってん

世界は一枚の絵だけ残して滅んだ。

どのような言葉を耳にしても

目にしても

詩であるように感じるのは

ぼくのところが、そう聞こえる

そう見える準備をしているからだ。

それは、どんな言葉の背景にも

その言葉が連想させる

さまざまな情景を

たくさん、もうたくさん

ぼくのところが重ね合わせるからだ。

詩とはなにか？

そういったさまざま情景を

(目に見えるものだけではない)

重ね合わそうとするところの働きだ。

部長！

笑

人生は一行の

ボードレールにしか過ぎない。

笑

そうだったら、すごいことだと思う。

笑

ひまわりのそばでは、洗濯物がよく乾く。

鼻水で縄跳びするヒキガエルたち。

仲のよい姉妹たちが

金魚の花火を見上げている。

夜空に浮かび上がる

光り輝く、真っ赤な金魚たち。

金魚が回転すると冷たくなるというのはほんとうだ。

どの金魚も

空集合。

Φ。

2002年1月14日の日記から抜粋。

(ああ、てっちゃんのことね。)

いままで見た景色で、いちばんきれいだと思ったのはなに？

カナダで見たオーロラ。

カナダでも見れるの？

うん。北欧でも見れるけど。

どれぐらい？

40分くらいつづくけど

20分くらいしか見られへん。

どうして？

寒くて

寒くて？

冷下30度以下なんやで。

ギョギー、目が凍つつちやうんじやない？

それはないけど。

海なら、どこ？

パラオ。

うううん、だけど、沖縄の海がいちばんきれいやったかな。

まことに

人生は

一行のボードレールである。

快樂から引き出せるのは快樂だけだ。苦痛からは、あらゆるものが引き出せる。笑

この世から、わたしがいなくなることを考えるのは、それほど困難なことでも怖ろしいことでもないのだけれど

なぜ、わたしの愛するひとが、この世からいなくなることを考えると、怖ろしいのか。しゃべる新聞がある。

手から放そうとすると

「まだまだあるのよ、記事が。」
という。

1999年12月30日の日記から抜粋したもの。

あらゆる存在が非存在を想起せしめる。

ぼくは天邪鬼だから
いつも。

「いつも」は天邪鬼じゃないけれど。

詩というものは

結局のところ

星よ！

光よ！

太陽よ！

と叫べば

それでよし

というところがあると思う。

星よ！

光よ！

太陽よ！

キキ

金魚！

悲しみをたたえた瞳を持って牛たちが歩みくる。

金魚が回転すると

冷たくなるというのは、ほんとうですか？

仮面をつける。

絵の具の仮面。

筆の仮面。

印鑑入れの仮面。

掃除機の仮面。

ベランダの手すりの仮面。

ハサミの仮面。

扇風機の仮面。

金魚鉢の仮面。

輪投げの仮面。

潮騒の仮面。

夕暮れの仮面。

朝の仮面。

仕事の仮面。

お風呂の仮面。

寝ているときの仮面。

子供のとときの仮面。

死んだあとの仮面。

夕暮れがなにをもたらすか？

日光をよわめて

ちようど良い具合に

見えるとき

見えるようになるとき

ぼくは考えた。

事物を見ているのではない。

光を見ているのだ、と。

夕暮れがなにをもたらすか？

それは本来、ぼくの悲しみだった。

ぼくは出来たら、新しい悲しい気持ちになりたかった。

新しくなければならぬのだ。

それには、わたし自身が新しい言葉となって考えるしかあるまい。

いや、でも、しかしでちゆね。

それは言葉のなかにはないものだから

言葉と言葉のあいだにあるものなのかもしれないけれどん。笑

2004年の4月1日の日記から抜粋する。

4、5人の知人たちとしゃべるのは苦痛なのに
もっと多いか、一人か二人なら大丈夫なのはなぜだろう？

自分を出すがしんどいからか？

(ある自分というのは

他者とのなかで決定するので

一対一のときの自分は

相手一人に対して一人だから

相手の人数がたくさんだと

特定のペルソナを持つ必要がない

特定の一人に対するペルソナを持つ必要がない)

つぎつぎと人格を交代させるのは

ほんとに疲れる。

ひとりになることを恐れるな。

ひとりより少なくなることはないのだし

ひとりよりさびしくなることもないだろう。

キキ

金魚

それは本来、ぼくの悲しみだった。

できたら、ぼくは新しい悲しい気持ちになりたかった。

夕暮れがなにももたらすか？

仮面をつける。

悲しみをたたえた瞳を持って牛たちが歩みくる。

それは言葉のなかにないのだから

言葉と言葉のあいだにあるものだから

から

か。

わが傷はこれと言いし蟻 蟻をひく

Soul-Bar で

Junior の

Mama Used Said

はやりの金魚をつけて、お出かけする。

あるいは、はやりの金魚となって、お出かけする。

石には奇形はない。

記憶のすべてとは？

記憶とは、想起されるものだけ？

想起されないものは？

一生の間、想起されずに

でも、それが他の記憶に棹さして

想起せしめることもあるかもしれない。

どこかに書いたことがあるけど

いつか想起されるかもしれないというのは

いつまでも想起されないこととは違うのかな？

習慣的な思考に、とはすでに単なる想起にしかすぎない。

金魚のために

ぼくは、ぼくの振りをやめる。

矢メール。

とがらした鉛筆を喉に突きつけて

両頬で締め付ける。

ぼくだけの愛のために。

ストラップは干し首。

ぼくの恋人の金魚のために

夜毎本を手にして

人間狩りに出かける。

声が

そんなこととは、とうてい思え！

夜毎、レイモンド・ラブロックは

壁にかかった

恋人の金魚に

声が

知っている。

きのう、フランク・シナトラのことを思い出していた。

新しい詩が書けそうだ、ということ。

うれしいかなしい。

金魚、調子ぶっこいて、バビロン。

タスマニアの少年のペニスは、ユリの花のようだったと
金魚、調子ぶっこいて、バビロン。

枯山水の金魚が浮遊する。

いたるところ

金魚接続で

びきびき。

いっぴきびき。

にびきびき。

さんびきびき。

びきびき。

いっぴきびき。

にびきびき。

さんびきびき。

ス来る。

とラン座

匹一。

XXX

二 r t g h 8 9 r t y g n v 9 8 y n v y 8 9 g 絵ウ h g 9 ウ 8 f g y h 8 r t g y
 r 8 h 地 h j 地 j h 地 j f v g t d f c t w d f e y g r 7 ウ 4 h 地 5 j 地 5 4 ウ y
 8 5 4 ウ 7 r y g 6 y d s g f れ j n f 4 k l m g l ; 5、 y h p 6 j l ^ 7 7 k じえ
 ^ y j h w 9 t h j g 7 8 れ t y g f 3 4 8 y r t c v t h 5 4 ウ t y n v 5 7 4 6 y
 ん v 3 5 7 4 y t n c l 4 9 8 つ c v n 4 9 8 t n v 4 9 8 y n t 3 7 4 y 3 7 t y n
 9 4 8 y n r t 6 x 7 4 r v 2 3 c 4 7 t y 5 7 9 h 8 6 9 5 m 9 r つ b ヴ ア 有 為 f t
 y b 6 7 く え 4 r 2 3 4 5 v j ちよ j k d y p j k l .. h ; l j、 帆 印 b 湯 f t t r 糸
 y t f で t f r y t 3 フ エ t y 3 れ 7 6 t 8 3 ウ r g j 9 p y h 汁 9 k j t y j 彫 る 8
 y g 7 6 r 5 4 c w 4 6 w 6 t v 8 7 6 g 6 4 3 エ g b h d ゲ う 7 h 9 p m 8 位 0 l
 『 M y g b f y 5 れ う h h n 絵 h t g y n ; i m : d r s 6 糸 s 3 6 4 s 3 s 3 4 c t y
 日 お じ j k l j 不 k h j k c m ヴ イ f h f g t w f d t w f れ s w y ツ エ d ぎ い ウ エ つ
 て q q s n z k a j x s a o u d h a 7 8 絵 r 糸 絵 b k q w j で y r g 3 絵 r g j 家 f
 本 r b f g c ぬ 4 い t h b w や え あ f x k う え r j み う r y n x q w

ぎ、が抜けてるわ。

金魚、訂正する。

性格に言えば、提供する。

時計の針で串刺しの干し首に
なまで鯛焼き。

目ゾット・ふい。

赤い色が好きだわ。

と、金魚が行った。

ぼくも好きだよ。

とジャムジャムが答える。

あなたはもつと金魚だわ。

きみだって、もう金魚だよ。

ふたりはぜんぜん金魚だった。

大分県の宿屋の主人が振り返った。

も一度死んでごらん。

ああ、やっぱりパロディはいいね。

書いてて、気持ちいい。

打っててかな。

注射は打ったことないけど。

あ、打たれたことあるけど。
病院で。

暴れる金魚にブスっと。

あのひとの頬は、とてもきれいな金魚だった。

聖書には、割れたぎくろのように美しいという表現があるけど
あのひとの身体は

割れた金魚のように美しいとは

言え。

まるまると太った金魚よ、わたしを産みなさい。

ピュチュピュチュツと。

まるまると太った金魚よ、わたしを産みなさい。

オーティス・レディングがドッグ・オブ・ベイを

ぼくに歌ってくれていたとき

ぼくの金魚もいっしょに聞きほれていた。

ニャーニャー聞ってる。

ひどい闇だ。

新しい詩は、形がすばらしい。

ぼくはきのう

おとついかもしれない。

最近、記憶がぐちゃぐちゃで

きのうと、おとついが

ぼくのなかでは、さうとう金魚で

出かかっている。

つまずいて

喉の奥から

携帯を吐き出す。

突然鳴り出すぼくの喉。

無痛の音楽が

ぼくの携帯から流れ出す。

無痛の友だちや恋人たちの声が

ぼくの喉から流れ出す。

ポン！

こんなん出ましたけど。

ジョニー・デイルの右手に握られた

単行本は、十分に狂気だった。

狂気ね。

凶器じゃないのかしらん？ 笑

まるまると太った金魚よ、わたしを産みなさい。

ピュチュピュチュツと。

金魚、日にちを間違える。

もう一度。

ね。

monon と souso の

金魚。

monon と souso の

金魚。

金魚が、ぼくを救うことについて

父子のコンタクトは、了解。

これらのミスは、重大事件に間違い。

バツカじゃないの？

わかった。

歴史のいっぱい詰まった金魚が禁止される。

金魚大統領はたいへんだ。

もう砂漠を冒険することもできやしない。

してないけど。笑

冒険は、金魚になった

広大な砂漠だった。

モニターしてね。笑

こういうと、二千年もの永きにわたって繁栄してきた

わが金魚テイク・オフの

過去への口

金魚学派のパパ・ドミヌスは

ぼくに、そうつと教えてくれた。

金魚大統領の棺の

肛門の

栓をひねって

酔うと、

ぼくは金魚に生まれ変わった扇風機になる。

冷たい涼しい。

金魚のような

墓地。

ぼくの

monon と souson の

金魚たち。

いつのまにか、複製。

なんということもなく

ぼくを吐き出す

金魚の黄色いワイシャツの汚れについて

おぼろげながら

思い出されてきた。

二十分かそこらしたら

扇風機が、金魚のぼくを産む。

びよるん、

ぱっぱっと。

ぼくを有無。

ふむ。

ムム。

ぶちぶちと

ぼくに生まれ変わった黄色いワイシャツの汚れが

砂漠をかついで

魔法瓶と会談の約束をする。

階段は、意識を失った幽霊でいっぱいだ。

ぼくの指は、死んだ

金魚の群れだ。

ビニール製の針金細工の金魚が

ぼくの喉の奥で窒息する。

苦しみはない。

金魚は

鳴かないから。

金魚のいっぱい詰まった扇風機。

金魚でできた金属の橋梁。

冷たい涼しい。

の

デス。

ぼくの部屋の艶かしい

金魚の振りをする扇風機。

冷たい涼しい。

墓地のような。

風に。

あたりにきませんか？

キキ

きませんか？

キキ

金魚は、あたりにきませんか？

車で走っていると

車が走っていると

突然、金魚の振りをした扇風機。

あたりにきませんか？

キキ

金魚。

キキ

金魚迷惑。

注射イヤン。

キキ

金魚。

扇風機、突然、憂鬱な金魚の振りをする。

あたりにきませんか？

キキ

金魚。

車で走って

車は走って

あたりにいきませんか？

金魚のような

墓地の

冷たい涼しい

車に。

キキ

金魚。

キキ

金魚。

キキ

キイイイイイイイイイイイイイイイイイ

ツルンツ。

よしこちゃん

こんな名前の知り合いは、いいひんかった。
そやけど、よしこちゃん。

キキ

金魚。

しおりの

かわりに

金魚をはさむ。

よしこちゃんは

ごはんのかわりに

金魚をコピーする。

きき

金魚。

よしこちゃん。

晩ご飯のかわりに

キキ

きのうも、ヘンな癖がでた。

金魚の隣でグースカ寝ていると

ぼくの瞼の隙を見つけて

ぼくのコピーが金魚の振りをして

扇風機は、墓地の冷たい涼しい

金魚にあたりにきませんか？

きのうは金魚の癖がでた。

石の上に

扇風機を抱いて寝ていると

グースカコピー

ぼくの寝言が

金魚をコピーする。

吐き出される金魚たち。

憂鬱な夜明けは、ぼくのコピーの金魚のコピーでいっぱいだ。

はみ出した金魚を本にはさんで

よしこちゃん。

ぼくを扇風機で

金魚をコピーする。

スルスルー。

ピー、コッ。

スルスルー。

ピー、コッ。

スルスルー。

いひひ。笑

ぼくは金魚でコピーする。

真っ赤に染まった

ぼくの白目を。

金魚のコピーが

ぼくの寝ている墓地の

あいだをスルスルー

と。

扇風機、よしこちゃん。

おいたっ！

チチ

タタ

無傷なぼくは

金魚ちゃん。

チチ

マエストロ。

金魚は置きなさい。

電話にプチチ

おいたは、あかん。

フチ。

魔法瓶を抱えて

金魚が砂漠を冒険する。

そんな話を書くことにする。

ぼくは二十年くらい数学をおしえてきて

けつきよく、数について、あまりにも無恥な自分があるのに

飽きた。

秋田。

あ、きた。

背もたれも金魚。

キッチンも金魚。

憂鬱な金魚でできたカーペット。

ぼくをコピーする金魚たち。

ぼくはカーペットの上に、つぎつぎと吐き出される。

まるで

金魚すくいの名人のようだ。

見せたいものもないけれど

まるで金魚すくいの名人みたいだ。

二世帯住宅じゃないけれど

お父さんじゃない。

ぼくのよしこちゃんは

良妻賢母で

にきびをつぶしては

金魚をひねり出す。

じゃなくて

金魚をひねる。

知らん。

メタ金魚というものを考える。

メタ金魚は言語革命を推進する。。

スルスルー

つと。

メタ金魚が、魔法瓶を抱えて砂漠を

冒険するのをやめる。

ぼくのは

金魚にして。

悩み多い青年金魚たち。

フランク・シナトラは

自分の別荘のひとつに

その別荘の部屋のひとつに

金魚の剥製をいっぱい。

ぼくの憂鬱な金魚は

ぼくのコピーを吐き出して

ぼくをカーペットの上に

たくさん

ぴちゃん、ぴちゃん。

ぴちゃん。

て、

キキ。

金魚。

扇風機といっしょに

車に飛び込む。

振りをする。

キキ

金魚

ぴちゃん。

ぴちゃん。

ププ。

ああ

結ばれる

幸せな

憂鬱な

金魚たち

ぼくは、だんだん金魚になる。
なっていくぼくがうれしい。

し、

死ね！

ピ

nounoun と nosoun の

金魚。

nounoun と nosoun の

金魚。

金魚が、ぼくを救うことについて

父子のコンタクトは、了解。

これらのミスは、重大事件に間違い。

バツカじゃないの？

わかった。

歴史のいっぱい詰まった金魚が禁止される。

金魚大統領はたいへんだ。

もう砂漠を冒険することもできやしない。

してないけど。笑

冒険は、金魚になった

広大な砂漠だった。

モニターしてね。笑

こういうと、二千年もの永きにわたって繁栄してきた

わが金魚テイク・オフの

過去へのロツテリア。

金魚学派のパパ・ドミノスは

ぼくに、そうつと教えてくれた。

金魚大統領の棺の

肛門の

栓をひねって

酔うと、

ぼくは金魚に生まれ変わった扇風機になる。

冷たい涼しい。

金魚のような

墓地。

ぼくの

≡nomom と sounou の

金魚たち。

いつのまにか、複製。

なんということもなく

ぼくを吐き出す

金魚の黄色いワイシャツの汚れについて

おぼろげながら

思い出されてきた。

二十分かそこらしたら

扇風機が、金魚のぼくを産む。

びいよるん、

ぱっぱと。

ぼくを有無。

ふむ。

ムム。ツテリア。

ぷちぷちと

ぼくに生まれ変わった黄色いワイシャツの汚れが

砂漠をかついて

魔法瓶と会談の約束をする。

階段は、意識を失った幽霊でいっぱいだ。

ぼくの指は、死んだ

金魚の群れだ。

ビニール製の針金細工の金魚が

ぼくの喉の奥で窒息する。

苦しみはない。

鳴かないから。

一夜の妻に

金魚のぼくを吐き出していく

ぼくの黄色いワイシャツの汚れについて

金魚大統領と面会の約束をする。

当地の慣習として

それは論議の的になること間違い。

笑。

F U X X Y o u

これは

ふうう よう

と読んでね。

笑

当地の慣習として

眼帯をした金魚の幽霊が

創造と現実とは大違いか？

想像と堅実は大違いか？

SOUSOU

意識不明の幽霊が

金魚の扇風機を

手でまわす。

四つ足の金魚が、ぼくのカーペットの上に

無数の足をのばす。

カーペットは、ときどき、ぼくの振りをして

金魚を口から吐き出す。

ぷっん、ぷっん、と。

ぼくの白目は真っ赤になって

からから鳴かなかった。

金魚に鳴いてみよと

よしこちゃんがさびしそうにつぶやいた。

完全密封の立方体金魚は

無音で回転している。

とつてもきれいな

憂鬱。

完全ヒップなぼくの扇風機は

金魚の羽の顧問だ。

カモン！

ぼくは、冷蔵庫に、お父さんの金魚を隠してる。

金魚のお父さんかな。

どっちでも、おなじだけど。笑

ときどき、墓地になる

金魚

じゃなかった

ぼくの喉の地下室には

フランク・シナトラ。

目や耳も

呼吸している。

息と同じように

目や

耳も

呼吸している。

呼吸しているから

窒息することもある。

目や耳も、呼吸している。

白木みのる

白木みのるってあだ名の先生がいた。

ぼくと一番仲のよかった友だちがいた研究室の先生だったけど

とても高い声で

キキ、キキ

って鳴く

白木みのるに似た先生だった。

ある日、その先生の助手が

(こちらは顔の大きなフランケンシュタインって感じね。) 学生実験の準備で、何か不手際をしたらしくって

その先生に、ものすごいケンマクでしかられてたんだって

「キキ、キミ、その出来そこないの頭を

壁にぶち当てて、反省しなさい。」

って言われて。

で、

その助手もヘンな人で

言われたとおりに

その出来そこないの頭を

ゴツン、ゴツン

って、何度も壁にぶちあてて

「ボボ、ボク、反省します。」

反省します。」

って言ってたんだって。

友だちにそう聞いて

理系の人間って、ほんとにイビツなんだなって

思った。

知らないがゆえに

愛を知らずに

感じられないがために

愛がどんなものか、こっけいともいえる過大な期待をもっていた。

詩人や作家が愛について語るのは

じつは知らないがゆえに、ではないだろうか。

知らないがゆえに、それほど言葉を尽くして語るのである。

2002年3月2日、電話。

なんだかぼくたち、唾が合うんだよねえ。

だって。

うまじゃなくて。

2001年7月25日。

小さな動物が死んでいるのを見てかわいそうと思う。

もしも巨大な動物が目の前で死骸として横たわっていたら
ただ気持ちが悪くなるだけだろう。

2001年12月30日。

田中さんといると、いつも軽い頭痛がする、と言われたことがある。

ウの目、タカの目。

方法序説のように長々とした前戯。

サラダバー食べすぎてゲロゲロ。

世界。

人間は言葉を発明して、初めて世界を創り出すことができた。

言葉。

言葉は、自我とわたしを結ぶ唯一の媒体である。

言葉がそのような媒体であるのは

言葉自体が自我でもなく

わたしでもないからであるが

媒体という言葉をはかの言葉にして

言葉は自我であると同時にわたしであるからだと
思っているわたしがいる。
愛。

わたしは愛に近づかなかった。

愛の方では、わたしに近づこうとしていたのに。

しかし、愛が近づくと

わたしはそれから逃げたのだ。

いつも。

理解を超えるものはない。

理解を超えるものはない。

いつも理解が及ばないだけだ。

お母さんを吐き出す。

お父さんを吐き出す

うっと、とつぜんえずく。

立命館の学生と

タコジャズでチューハイを飲んでたとき

いっしよに寝れば

同じ布団のなかで寝れば

敵にも愛情が芽生えるんじゃないかなって言った。

敵といっしよに寝る。

箴言に、(だったかな)

狼と羊がいっしよにいる

とか

狼と赤ん坊がいっしよに遊んでるみたいなのが書かれていたような気がする。

いっしよに眠る？

だったかな。

内臓を吐き出して

太陽の光にあてる。

浜辺で寝そべるぼく

の

イメージ。

たくさんの窓。

たくさんの窓にぶら下がる

たくさんのぼく

の

抜け殻。

ぼくの姿をしたさなぎ。

紺のスーツ姿で、ぼうつと突っ立っているぼく。

ぼくのさなぎの背中が割れる。

スーツ姿のぼくが

ぼくのスーツ姿のさなぎから

さなぎの背中から

ぬーつと出てくる。

死んだまま。

アドルニーエン。

アドルノする。

難解にするという意味のドイツ語

だという。

調べてないけど、橋本くんに教えてもらった。

2002年2月20日のメモは

愛撫とは繰り返すことだ。

アドルニーエン。

アドルノする。

難解にするという意味のドイツ語

だという。

調べてないけど、橋本くんに教えてもらった。

2002年2月20日のメモは

愛撫とは繰り返すことだ。

四面憂鬱。

誌面憂鬱。

氏名憂鬱。

四迷憂鬱。

4名湯打つ。

湯を打つ？

意味はわからないけど、なんだか意味ありげ。
湯をまねる。

曲がった湯につかった賢治は
硫黄との混血児だった。

湯を打つと

たくさん賢治が生えてくるのだった。

たとえば官房長官のひぎの上にも

スポーツキャスターの方の上にも

壁にかかったポスターの上にも

きのう踏みつけた道端の紙くずの上にも

賢治の首がによきによき生えてくるのだった。

身体はちぢこまって

まるで昆虫のさなぎみたい

ぶら下がって

生えてくるのだった。

窓を覗くたくさんの賢治たち。

さなぎのようにぶら下がって

窓の外から、わたしたちを覗いているのだ。

「湯を打つ」の意味を、こうして考えて見るとよくわかるよね。

自分で引っかいた皮膚の上で

て、するほうがいいかな。

だね。

キュルルルル。

パンナコッタ、どんなこった。

宝塚。

18、9のとき。

ひとりで見に行ってた。

目のグリーンの子供と母親。

外国人だった。

子供は12、3かな。

きれいな髪の子だった。

母親は栗色の髪の毛の、34、5歳かな。

宝塚大劇場に、ひとりで行ってたとき

ときどき行ってたんだよ

ななめ前の席に坐ってた。

子供が、自分に近い方。

宝塚の街のことは、隅から隅まで知っていた。

いろんなところ、ぶらぶらしていた。

あれから何十年経つたろう。

もしいま、宝塚の街を歩いてみたら

わたしの傍らをすれちがっていく

笑い声に出会うだろう。

それはたぶん

きつと

宝塚の街を通りすぎていく

風だったかもしれない。

さつき。

22、3のときのことだった。

わたしの住んでいた長屋の斜め向かいの家の
女の子。

11才。

(男の子3人と、女の子1人なので、あずかっていた。寝泊りしていた。)

この子と、向かいのスナックのママの娘。

12才。

この二人を連れて

あるさつきの季節に

夕方

東山の霊山観音のぐるり

前いっぱいライトアップされていた。

さつきが咲き乱れていた。

この光景は、一生忘れないでおこうと、ここに誓った。

靴。

27のとき。

忍び逢い

という名前のスナックを経営していた。

そのとき

京都女子大学の女学生と知り合った。

その女子学生は

店に聖書を売りにきたのだ。

気のいい女の子で、ふたりで食事をしたり、喫茶店で話をしたり

デートした。

この子が、自分の近所の17の女の子を

ある日、連れてきた。

その娘も、めちやくちやかわいい女の子だった。

名前はたしか優ちゃんだった。

芦屋に住んでいるのだが、きょうは京都に遊びに来たの、っていう。

3人で南禅寺に行った。

南禅寺の山門をくぐりぬけて

50メートルほど行くと

お滝に上がる山道がある。

山門の入り口に第二疎水のコンクリートの土台があつて

(グリーンのレンガ貼り)

ハイヒールの中に入っていた小石をとるのに

片手を、その土台において

立ったまま

ぱっぱつと

その小石を落とした。

片方の靴のかかとから。

わたしが見つけているのに気づくと

とても恥ずかしそうな顔をして見せた

あの娘の表情も

そうだ

けっして忘れはしないと

ここに誓つたのだ。

優ちゃん。

真つ赤な麦藁帽子と

白い薔薇模様のワンピース。

だけど、あのとときの靴の色は忘れてしまった。

真つ赤な麦藁帽子と

白い薔薇模様のワンピース。

これは覚えているのに。

あの娘の恥ずかしげな顔とともに。

だけど、あのとときの靴の色は忘れてしまった。

あらゆる皮膚についての言葉を引き剥がそう。

詩人に要請されることは、何も無い。

皮膚についての言葉を引き剥がすこと以外に。

こころみに、ぼくの皮膚についての言葉を引きれがす。

十歳のときの記憶の一つが、雲を映す影となって地面を這っている。

こころもち、雨が降った日の水溜りに似ていないともいえない。

風景は成熟を拒否する。

ローリング・ストーンズのダイスをころがせを聞いたのは
中学一年生の時のことだった。
かな。

かなかな。

同級生の女の子がストーンズが好きで

その子の家に遊びに行ったとき

ダイスをころがせ、がかかっていた。

ぼくと同じ苗字の女の子だった。

名前は、かなちゃんって呼んでたかな。

忘れた。

たぶん、かなちゃん。

で、ストーンズの歌は、ぼくには、へたな歌に聞こえた。

だって、ビートルズやカーペンターズや

ザ・ピーナッツとか

つなき&みどりだとか

ロス・アラモスだとか

マロだとか

ミツシエル・ポルナレフだとか

シルビー・バルタンだとか

そんなんばつかかかってたんだもん。

親の趣味のせいにするのは、子供の癖です。

パンナコッタ、どんなこった。

チチ。

マルコはもう迷わないだろう。

あらゆる皮膚についた言葉を引き剥がそう。

ダイスをころがせは、いまでも、ぼくのマイ・フェバリット・ソングだす。

大学のときは、リンダ・ロンシュタットが（ドかな）歌ってた。

デスパレイドも歌ってたなあ。

ピッ。

パンナコッタ、どんなこった。

どんなん起こった？

チチ。

もうマルコは迷うことはないだろう。

迷ってた？

パンナコッタ、どんなこった。

どんなん起こった？

チチ。

もうマルコは迷うことはないだろう。

迷ってた。

三脚台。

ガスバーナー。

窓ガラス。

水滴。

水滴に映った教室の風景。

窓ガラス。

光。

マルコはもう迷うことはないだろう。

迷ってたのは、自分のつくった地図の上だ。

自分のまわりに木切れで引っかいた傷のような地図の上だ。

三脚台。

トリポッド。

かわいい表紙なので、ついつい買っちゃったよ。

で、こんなこと考えた。

ある日、博士が

(うううん、M博士ってすると、星さんだね。)

軽金属でできた三本の棒の端っこを同時に指でつまんだら

それがひよいと持ち上がった

三角錐の形になったんだって。

で、博士が指でさわると、その瞬間に歩き出したんだって。

さわると、っていうか、さわろうとして手を近づけただけっていうんだけど。

で、その三角錐のべき線の形になった三本の棒についていろいろ調べると

その三本の棒の太さと長さの比率がいっしょなら

どんな材質の棒でも、三本あれば、そんな三角錐ができるんだって。

て、いうか、もうそれは過去の話です。笑。

いまでは、荷物運びに、その三本の棒が大活躍してますし

その三本の棒の上にトレイをのっけると

テーブルの上で

ひよこひよこ動くんです。

お肉を上のにのっけると

さわろうとするだけで

テーブルの上のホットプレートの上に

お肉を運んで

ジュ。

頭を下げて

ジュ。

かわいい。

ジュ。

ペットの代わりに、三本の棒をひよこひよこさせるのが大流行。

町中、三本の棒が、たくさんの人のうしろからひよこひよこついてっちやう。

で、ジュ。

で、ジユ。

パンナコツタ、どんなこつた。
チチ。

マルコはもう迷わないだろう。

迷ってた？

迷ってたかも。

パンナコツタ、どんなこつた。

ううぶ。

ちゃあつてた。

Aじゃない。

Eだ。

リルケは。

ちははっ。

視点を変える。

視点を変えるために、目の位置を変えた。

肩の位置に下ろした。

はじめは、像を結ぶのに時間がかかったが

そのうち、目は、自然と焦点を結ぶらしく

(あたりまえか。 うん？ あたりまえかな？)

像を結ぶのに、それほど時間がかからなくなった。

移動しているときの風景の変化は

顔に目があったときには気がつかなかったのだが

ただ歩くことが、とてもスリリングなのである。

身体を回転させたときの景色の動くさまなど

子供の時に乗ったジェットコースターが思い出された。

ただ階段を下りていくだけでも、そうとう危険で

まあ、壁との距離がそう思わせるのだろうけれども

顔に目があったときとは比べられない面白さだ。

左右の目を、チカチカとつぶったり、あけたり。

風景が著しく異なるのである。

顔にあったときの目と目の距離と、

肩にあるときの目と目の距離の差なんて

そんなにたいしたもんじゃないけど、目に入る風景の違いは著しい。
寝る前に、ちかちかと目をつぶったり、あけたり。

ひとつの部屋にいるのに、異なる二つの部屋にいるような気分になる。

目の離れている人のことを「目目はなれ」と言うことがあるけど

そういえば、志賀直哉、じゃなかった、ああ、石川啄木じゃなくて

漱石の知り合いの、ええと、あれは、あれは、だれだっけ？

啄木じゃなくて、ええと

あ、正岡子規だ！

正岡子規がすぐれていたのは、もしかしたら

目と目の間が、あんなに離れていたからかもしれない。

人間の顔の限界ぎりぎりに目が離れていたような気がする。

すごいことだと思う。

こんど、胸と背中に目をつけようと思うんだけど、

どんな感じになるかな。

あ、それより、三つも四つも

いんや、いっそ、百くらいの目だまをつけたらどうなるだろう。

百もの異なる目で眺める。

あ、この文章って、プルーストだったね。

The Wasteless Land.

で、引用してたけど

じつさい、百の異なる目を持つてたら

いろいろなもの違って見えるだろうね。

百もの異なる目。

違う意味だけどね。

生態学的に（で、いいのかな？）百もの目を持つてたら？

って考えたら、ひゃー、って思っちゃうね。

あ、妖怪で、百目つてのがいたような気がする。

いたね。

水木しげるのマンガに出てたなあ。

でも、百も目があったら、花粉症のぼくは

いまより50倍も嫌な目にあうの？

50倍つてのが単純計算なんだけどね。

あ、

プチッ。

プチ。

プチ、プチ。

あの包装用の、透明のプチプチ。

指でよくつぶすあのプチプチ。

プチプチのところに目をつけるのね。

で、指でつぶすの。

プチプチ。

プチプチって。

プ。

ブブ。

ブクブホッ。

いつのまにか、ぼくは自分の身体にある目を

プチプチ。

プチプチって。

ブ。

ブブ。

ブクブホ。

って。

で、

宇宙の構成について考える。

物質がなぜあるのかは、考えない。

あるのだ。

ほとんどが虚無の宇宙。

空間的に。

で、

地球について考える。

何十億年か昔と、今現在について考える。

まあ、何十億年かまえなんて、じっさいのところは知らんけど。

まあ、本やテレビで知った限りはってことで。

複雑化。

結びついてる。

いろいろ。

変化している。

いろいろ。

で、

意識について考える。

ひとりの人間の意識について考える。

その人間が思考するときのことを考える。

その人間がはじめて思考したときのことを考える。

ポオがユリイカで発見したことは

いや、ユリイカが発見だったのだけれど

ほとんどあたつてると思う。

意識が対象とするものを物質に

対象を結びつける力を引力や電磁気力なんかに

意識の変化を物質の変化や状態の変化にたとえてみる。

ポオがしたように。

宇宙について考える。

宇宙のほとんどが虚無であることについて考える。

物質はある。

なぜ物質があるのだろうか。

と考えたことはあっても

なぜ虚無があるのだろうかと考えたことはなかった。

物質があるからだろうか。

虚無が存在するためには、物質が必要だからだろうか。

ちやうね。

言葉で、また遊んでる。

ま、いつだって、言葉で遊んでるんだけど。

ひとりひとりが別の宇宙を持っているって書いてたのは

ディックだったかな。

リルケだったかな。

ふたりとも

kの音で終わってる。

あつすけ。

は

e だね。

笑。

おそまつ。

笑。

彼が笑うのを見ると、いつもわたしは不安だった。

わたしの話が面白くて笑ったのではなく

わたしを笑ったのではないかと

わたしには思われて。

表情のない顔に引っ込む。

この言葉はまだ、わたしのものではない。

わたしのものとなるにつれて、物質感を持つようになる。

触れることのできるものに。

そうすれば変形できる。

切断し、結び合わせることができる

せつ、

戦争を純粋に楽しむための再教育プログラム。

あるいは、菓子袋の中のピーナッツがしゃべるのをやめると

なぜ、隣の部屋に住んでいる男が、わたしの部屋の壁を激しく叩くのか？

男の代わりに、柿の種と称するおかきが代弁する。(大便ちやうで。)

あらゆることに意味があると、あなたは思っていないまいませんか？

人間は、ひとりひとり自分の好みの地獄に住んでいる。

これは、『鴨川—THE GATES OF DELIRIUM。』のための注釈。』のための注釈か？

- 本来ならばシェイクスピアがいるべきところに、地球座の舞台の上に、立方体の海を配置する。 □その立方体の一辺の長さは、五十センチメートルとする。 □この海は、どの面も大気に触れることがなく、どの面も波が岸边に打ち寄せることのないものとする。
- もしも、大気に触れる面があったとしても、波が打ち寄せる岸边があったとしても、

立方体のどの面からも、どの辺からも、どの頂点からも、音が漏れ出ることはない構造をしている。□海は、いつさいの音を観客たちに聞かせることはない。□空中に浮かんだ立方体の海が、舞台の上で耀いている灯明の光をきらきらと反射しながら、回転している。□回転する方向をつぎつぎに変えながら。□他の俳優たちも、シェイクスピアと同じように、立方体の海に置き換えてみる。□観客たちも、みな同じように、立方体の海に置き換えていく。□劇場は静止させたまま、すべての俳優と観客たちを立方体の海に置き換えて、回転させる。□その光景を眺めているのは、ぼくひとりで、ぼくの頭の中の劇場だ。□しかし、その光景を眺めているぼく自身を、立方体の海に置き換えてみる。□ぼくは、打ちつけていたキーボードから離れて、部屋のなかで、くるくると回転する。□頭を振りながら、くるくると回転する。□息をついて、床に坐り込む。□キーボードが勝手に動作する。□文字が画面に現われる。□海のかわりに、地面や空の立方体が舞台の上で回転する。□立方体に割り抜かれた空。□立方体に割り抜かれた地面。□立方体に割り抜かれた海。□立方体に割り抜かれた風。□立方体に割り抜かれた光。□立方体に割り抜かれた闇。□立方体に割り抜かれた円。□立方体に割り抜かれた憂鬱。□立方体に割り抜かれたシェイクスピア。あらゆることに意味があると、あなたは思っていないかもしれませんか？「ぼくらはめいめい自分のなかに天国と地獄をもってるんだ」

(ワイルド『ドリアン・グレイの画像』第十三章、西村孝次訳)「ぼくだけじゃない、みんなだ」(グレッグ・ベア『天空の劫火』下・第四部・50・岡部宏之訳) 人間は、ひとりひとり自分の好みの地獄に住んでいる。そうかなあ。そうなんかなあ。わからへん。でも、そんな気もするなあ。きょうの昼間の記憶が、そんなことを言いながら、驚くほどなめらかな手つきで、ぼくのことを分解したり組み立てたりしている。ほんのちよつとしたこと、ささいなことが、すべてのはじまりであったことに突然気づく。「ふだん、存在は隠れている。」(サルトル『嘔吐』白井浩司訳)「そこに、すぐそのそばに」(ジイド『ジイドの日記』第二卷・一九一〇、カヴァリエール、八月、新庄嘉章訳) きのうの夜と、おとついの夜が、知っていることをあらいざらい話すように脅迫し合う。愛ではないものからつくられた愛。それとも、それは愛があらかじめ違うものに擬装していたものであったのか。いずれにしても、愛が二度と自分に訪れることがないと思われることには、なにかこころ穏やかにさせるところがある。びっくりした。またわたしは、わたし自身に話しかけていた。吉田くんだと思つて話してたら、スラトミンっていう栄養ドリンクのラベルの裏の説明文だったから。人工涙液マイティアも、ぷつぷつ言っていた。「すべてが現実になる。」(フレデリック・ポール&C・M・コーンブルース『クエーカー砲』井上一夫訳)「あらゆるものが現実だ。」(フィリップ・K・ディック『ユービツ

ク・スクリーンプレイ』²³、浅倉久志訳）音が動力になる機械が発明された。もし、出演者のみんなが黙ってしまっても、ぼくが話しつづけたら、テレビが見つづけられる。どうして、ぼくは恋をしたがるんだろう？ その必要がないときにでも。一度失えば十分じゃないか、とりわけ、恋なんて。電車に乗っていると、隣の席にいた高校生ぐらゐの男の子が英語の書き換え問題をしていた。I'm sure she is Keiko's sister. Ⅱ She must be Keiko's sister. これを見て、ふと思った。どのように客観的な記述を試みても、書き手の主観を拭い去ることはできないのではないかと。死の味が味わえる装置が開発された。人間だけではなく、動物のも、植物のも、鉱物のも。なぜなら、もともと、人間が、他の動物や植物や鉱物であったからである。では、水は？ もっとも必要とされるものが、もつともありふれたものであるのは、なぜか。水、空気、地面、重力。人間は砂によって移動する。人間は砂の中をゆっくりと移動する。人間は直立したままで、砂に身をまかせれば、砂が好きなところに運んでくれる。砂で埋もれた街の道路。二階の部屋にも、五階の部屋にも行ける。砂で埋もれた都会の街。しかし、砂以外の街もある。（といって、チョコレートや納豆やミートボールなんて食べ物も陳腐だし、ミミズや蟻や蟹なんて生き物もありふれてるし、靴下や扇風機や鍵束なんて物も平凡だけどね。）「同類の人に会うといつも慰められます」（エリカ・ジョンズ『あなた自

身の生を救うには』柳瀬尚紀訳）まったくいっしょ。笑。ニーチェは、自分の魂を自ら創り出した深淵に幽閉する前に、道行くひとに、よくこう訊ねたという。わたしが神であることを知っているか、と。ぼくは、このエピソードを思い出すたびに涙する。たとえば、それが、そのときのぼくにできる最善のことではなかったとしても、それがぼくにできる最善のことだと、そのときのぼくには思われたのであった。「無用の存在なのだ。どうして死んでしまわないのだろうか？」（フィリップ・K・ディック『アルファ系衛星の氏族たち』1、友枝康子訳）父親をおぶって階段を上る。わぎと足を滑らせる。むかし、父親がしたことを仕返したただけだけど。博物館に新参者がやってきた。古株たちが、あれは偽物だと言って、いじめるように、みんなにけしかける。ところで、みんなは、古株たちも偽物だということを知っている。もちろん、自分たちのことも。階段を引きずって下りていくのは、父ではない。母でもない。自分の死体でもない。読んできた書物たちでもない。「思うに、われわれは、眼に見えている世界とは異なった別の世界に住んでいるのではないだろうか。」（フィリップ・K・ディック『時は乱れて』二、山田和子訳）と、踊り場に坐り込んで考える。隣に置いたものから目をそらせて。「人間は、まったく関連のない二つの世界に生きている」（トマス・M・ディッシュ『歌の翼に』4、友枝靖子訳）発掘して掘り出されるのはごめんだな。親は子供の死ぬことを願った。子

供は死んだ。子供は親が死ぬことを願った。親は死んだ。どちらの願いも、簡単に実現する。毎日、繰り返し。恋人が吊革だったらうれしい。もちろん、自分も吊革で。隣に並んで、ぶらぶらするって楽しそうだから。でも、首をつられて、ぶらぶらする恋人同士ってのはやだな。会話の中で、ぜんぜん関係ないのに、むかし見た映画のワン・シーンや、音楽が思い出されることがある。いや、違うな。ぼくが思い出したというより、それらが、ぼくに思い出させたといっぴいような感じがする。強くする。賀茂川、高野川、鴨川の、別々の河川敷に同時に立つぼく。同じ一つの河川敷に立つ、年齢の異なる複数のおぼく。川面に川の景色が映っているというのは、きみの姿がぼくの瞳に映っていると、ぼくがきみを見ているのと同様に、川が川のそばの景色や空を見つめているのだよ。雨の日には、雨にぬれた店の床のくぼみに溜まった汚れた水が見つめている。雨の日の軒下にぶら下がった電灯の光。汚れた水が憧れのまなざしで、にじんだ光を見上げていたのだ。動物のまねばかりする子供たち。じつは、人間はとうの昔に滅んだので、神さまか宇宙人が、生き残った動物たちを人間に作り変えていたのだ。じゃあ、ぼくが海のことを思い出しているのではなく、海がぼくのことを思い出しているっていうことだ。「世界はいちどきには一つにしたほうがいい、ちがうかね？」（ブルース・スターリング『スキズマトリックス』第三部、小川隆訳）「きみがいま生きているのは現実の世界だ。」（サ

ミュエル・R・デイレイニー『アインシュタイン交点』伊藤典夫訳）「精神もひとつの現実ですよ」（ガデンヌ『スヘヴェニンゲンの浜辺』19、菅野昭正訳）呼吸をするために、喫茶店の外に出る。店の外の道路は、市松模様舗装されている。□四角く切り取られた海。□四角く切り取られた空。□四角く切り取られた川。□四角く切り取られた地面。□四角く切り取られた風。□四角く切り取られた虎。□四角く切り取られた円。□四角く切り取られた昨日。□四角く切り取られた憂鬱。□四角く切り取られたシェイクスピア。見ていると、それらは、数字並べのプラスティックのおもちゃのように、つぎつぎと場所を替えていく。シュコシュコ、シュコシュコ、つと。シュコシュコ、シュコシュコ、つと。なんだミン？

世界が音楽のように美しくなれば、

音楽のほうが美しくなくなるような気がするんやけど、

どやろか？ まっ、じっさいのところ、わからんけどねえ。笑。

バリ行ったことない。中身は、どうでもええ。

風景の伝染病。恋人たちはジタバタしたはる。インド人。

想像のブラヤなんて、いやらしい。いつでも、つけてや。笑。
ぶひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ。

ゴホン、ゴホン。

ある日、風景が咳をひとつ、ふたつ。

ゴホン、ゴホン。

そしたら、そばの風景も

ゴホン、ゴホン。

咳をしだした。

そしたら、そのそばにある風景が

最初に咳をした風景に似てきて

ゴホン、ゴホン。

咳がひどくなつて

とうとうそっくり

瓜二つになつて

同じ風景がふたつ。

みつつ。

ゴホン、ゴホンとするたびに

同じ風景がよつつ、いつつ。

ゴホン、ゴホン。

むつつ、ななつ、と。

風景の伝染病が広がって

とうとう、すべての風景が

たったひとつの風景になりましたとき。

(あれっ、たくさんの同じ風景じゃないの?)

細かいことは言わんでよろしい。(プフツ)

ゴホン、ゴホン。

ある日、吉田くんが咳をひとつ、ふたつ。

ゴホン、ゴホン。

そしたら、そばの山本くんも

ゴホン、ゴホン。

咳をしだした。

そしたらまた、そのそばにいた阿部くんまで
最初に咳をした吉田くんに似てきて

ゴホン、ゴホン。

咳がひどくなつて

とうとうそっくり

瓜二つになつて

吉田くんが二人。

三人。

ゴホン、ゴホンとするたびに

吉田くんが四人、五人。

ゴホン、ゴホン。

六人、七人、と。

吉田くんの伝染病が広がって

とうとう、すべての人が

たったひとりの吉田くんになりましたとき。

(あれえ、おおぜいの同じ吉田くんじゃないの?)

細かいことは言わんでよろしい。(プフツ。)

ゴホン、ゴホン。

ある日、納豆が咳をひとつ、ふたつ。

ゴホン、ゴホン。

そしたら、そばのマーガリンも

ゴホン、ゴホン。

咳を شدした。

そしたらまた、そのそばにあった活性炭入り脱臭剤のキムコまで

最初に咳をした納豆に似てきて

ゴホン、ゴホン。

咳がひどくなって

とうとうそっくり

瓜二つになって

納豆がふたつ。

みつつ。

ゴホン、ゴホンとするたびに

納豆がよつつ、いっつ。

ゴホン、ゴホン。

むつつ、ななつ、と。

納豆の伝染病が広がって

とうとう、すべての食べ物が

たったひとつの納豆になりましたとき。

(あれ、たくさんの同じ納豆じゃないの？ それにキムコは食べ物じゃないでしょ？)

細かいことは言わんでよろしい。(プフツ)

ぶくぶくちやかば。

ぶくちやかば。

ぶくくとくぶくぶく。

ぶくくぶくぶく。

ぶくぶんがてるりん。

てるてるりん。

ぶくぶんがてるりん。

てるりんりん。

てるてるりんたら。

てるりんりん。

ふにふにふがが。

ふにふがが。

ふにんがふがが。

ふにふがが。

んがんがんがが。

んがんがが。

ふにふに、ふにやら。

ふにふにやら。

ふにふに、ふにやら。

ふにふにやら。

ぶくぶくちやかば。

ぶくちやかば。

ぶくぶくちやかば。

◦ ၂ > ၵ

◦ ၂ >

◦ > ငှ်

◦ ငှ်ငှ်

◦ ငှ်ငှ်ငှ်

◦ ငှ်ငှ်

◦ ငှ်ငှ်ငှ် ငှ်ငှ်ငှ်ငှ်ငှ်

◦ ငှ်ငှ်ငှ် ငှ်ငှ်ငှ်

◦ ငှ်ငှ်ငှ် ငှ်ငှ်ငှ်ငှ်ငှ်

◦ ငှ်ငှ်ငှ် ငှ်ငှ်ငှ်

◦ ငှ်ငှ်ငှ် ငှ်ငှ်ငှ်ငှ်ငှ်

◦ ငှ်ငှ်ငှ်ငှ်ငှ်

◦ ငှ်ငှ်ငှ်ငှ် ငှ်ငှ်ငှ်

◦ ငှ်ငှ်ငှ်ငှ်ငှ်

◦ ငှ်ငှ်ငှ်ငှ် ငှ်ငှ်ငှ်

◦ ငှ်ငှ်ငှ်ငှ် ငှ်ငှ်ငှ်

ペヘー。

ぶー。

ぶぶぶ。

べっ。

ぶぶぶ。

べっ。

ぺへ。

ぶぶぶ。

ぶへ。

ぺへ。

へえ。

ゴホン、ゴホン。

ある日、実際には起こらなかった事が咳をひとつ、ふたつ。

ゴホン、ゴホン。

そしたら、そのそばのもしかしたら起こったかもしれない事も

ゴホン、ゴホン。

咳をしだした。

そしたらまた、少し離れたところにあつた本当に起こつた事まで最初に咳をした実際には起こらなかつた事に似てきて

ゴホン、ゴホン。

咳がひどくなつて

とうとうそっくり

瓜二つになつて

実際には起こらなかつた事がふたつ。

みつつ。

ゴホン、ゴホンとするたびに

実際には起こらなかつた事がよつつ、いつつ。

ゴホン、ゴホン。

むつつ、ななつ、と。

実際には起こらなかつた事の伝染病が広がつて

とうとう、あらゆる事柄が

たつたひとつの実際には起こらなかつた事になりましたとき。

(それって、どうやって見分けんのよ？ つーか、一体全体、どういうこと?)

細かいことは言わんでよろしい。(プフッ)

ゴホン、ゴホン。

ある日、ひとつの*が咳をひとつ、ふたつ。

ゴホン、ゴホン。

したら、そばの@も

ゴホン、ゴホン。

咳をしました。

したらまた、そのそばにあった「まで

最初に咳をした*に似てきて

ゴホン、ゴホン。

咳がひどくなって

とうとうそっくり

瓜二つになって

同じ*がふたつ。

みっつ。

ゴホン、ゴホンとするたびに

同じ*がよつつ、いつつ。

ゴホン、ゴホン。

むつつ、ななつ、と。

*の伝染病が広がって

とうとう、すべての記号・文字・数字・アルファベットなどが

たったひとつの*になりましたとき。

(あれっ、たくさんの同じ*じゃないの？ それに、などって何よ、何か他にあるの？)

細かいことは言わんでよろしい。(プフッ)

ゴホン、ゴホン。

ある日、ぼくが咳をひとつ、ふたつ。

ゴホン、ゴホン。

そしたら、そばにいたぼくも

ゴホン、ゴホン。

咳を شدした。

そしたらまた、そのそばにいたぼくまで

最初に咳をしたぼくに似てきて

ゴホン、ゴホン。

咳がひどくなつて

とうとうそっくり

瓜二つになつて

同じぼくが二人。

三人。

ゴホン、ゴホンとするたびに

同じぼくが四人、五人。

ゴホン、ゴホン。

六人、七人、と。

ぼくの伝染病が広がって

とうとう、すべてのぼくが

たったひとりのぼくになりましたとき。

(あれ、おおぜいの同じぼくじゃないの？ それに、そもそもみんなぼくじゃない？)

細かいことは言わんでよろしい。(プフッ。)

ゴホン、ゴホン。

ある日、ひとつの風景が咳をひとつ、ふたつ。

ゴホン、ゴホン。

そしたら、そばにいた人も

ゴホン、ゴホン。

咳をしだした。

そしたら、そばにいた人が

最初に咳をした風景に似てきて

ゴホン、ゴホン。

咳がひどくなつて

とうとうそっくり

瓜二つになつて

同じ風景がふたつできた。

でもそのうち、

もとは風景じゃなかった方の風景が

ゴホン、ゴホン。

咳をすると、

もとの人の姿に戻っちゃって

そしたら、

もとは風景だった方の風景も

もとは風景じゃなかった方のもとは人だった方の人の姿に似てきて

ゴホン、ゴホンと咳をするたびに

もとは風景じゃなかった方のもとは人だった方の人の姿に似てきて

ゴホン、ゴホン。

咳をするたびに、

ふたつの風景は二人の人になったり

二人の人はふたつの風景になったりして

ゴホン、ゴホン。

そのうち、咳をするたびに

風景が人になったり、人が風景になったりして

とうとう、どちらがどちらか、わからなくなりましたとき。

(あれれー、これじゃ、同じフレーズの繰り返しじゃないじゃないの?)

細かいことは言わんでよろしい。(プフッ。)

ゴホン、ゴホン。

ある日、うれしいが咳をひとつ、ふたつ。

ゴホン、ゴホン。

そしたら、そばの楽しいも

ゴホン、ゴホン。

咳をしだした。

そしたらまた、別のところにあつた悲しいまで

最初に咳をしたうれしいに似てきて

ゴホン、ゴホン。

咳がひどくなつて

とうとうそっくり

瓜二つになつて

うれしいがふたつ。

みつつ。

ゴホン、ゴホンとするたびに

うれしいがよつつ、いつつ。

ゴホン、ゴホン。

むつつ、ななつ、と。

うれしいの伝染病が広がって

とうとう、すべてのこころの状態が

たったひとつのうれしいになりましたとき。

(あれ、たくさんの同じうれしいじゃないの?)

細かいことは言わんでよろしい。(プフツ。)

ゴホン、ゴホン。

ある日、ひとつが咳をひとつ、ふたつ。

ゴホン、ゴホン。

そしたら、そばのふたつも

ゴホン、ゴホン。

咳を شدした。

そしたらまた、そのそばにあったみつつまで

最初に咳をしたひとつに似てきて

ゴホン、ゴホン。

咳がひどくなつて

とうとうそっくり

瓜二つになつて

ひとつがふたつ。

みつつ。

ゴホン、ゴホンとするたびに

ひとつがよつつ、いつつ。

ゴホン、ゴホン。

むつつ、ななつ、と。

ひとつの伝染病が広がって

とうとう、すべての一つが

たったひとつのひとつになりましたとき。

(あれ、たくさんの同じひとつじゃないの？ それに一つじゃないのもあるでしょ？)

細かいことは言わんでよろしい。(プフツ。)

仕事帰りにミスド行って

ドーナッツ買って

はああ

くだらない。

ドーナッツの輪っかと、ミストのウェイトレスの顔を交換する。

運んだトレイト、聞こえてくる50年代ポップスを交換する。

はああ

くだらない。

コーヒーは

なんだか薄いしい。

そのコーヒーカップのシンボルマークと、パパの記憶を交換する。

バレンチノ。

なんで。

はああ

くだらない。

違うカフェに寄ろうかな。

チチチチチチチ。

なんだ、これ。

ミルフィー。

ムフツ。

フフ。

フアレル。

ねえ、

ぼくのこと、愛してる？

きょうは、もうほとんど寝てた。

きれいになる病気がはやってた。

ぼくは何年も前にかかって

ラジオで聞いて

知ってたけど

みんなは

あ、

ただ、ぼくたちは、くすくす笑って

みんなは

あ、

ただ、ぼくたちは、くすくす笑って

まだたすかる。

まだたすかる。

そのしぼんだ花びらは、わたしのおばだった。

淑女の成れの果てだ。

アニーホール。

腐りしぼんだ花びら。

(しぼみ腐った花びら、かしら?)

日曜日にかけて電話が土曜日につながる。

ボン・ボアージュ!

ディア。

きみの瞳が写した、ぼくの叫び声は

まだたすかる。

まだたすかる。

まだたすかる。

夕チケテー！

イヤン、途中で切れちゃったわ。
ファレル。

ぼくたちの間では

どんなことでも

起こったわけじゃない。

信じられないようなことしか起こらなかった。

いまでは信じられないような

すてきなことしか。(プフツ。)

モア・ザン・デイス。

パパやママは

ばらばらになったり

またひとつになったりしながら

航海する。

後悔する。

公開する。

こう理解する。

こう理解する。

愛しているふりをするのは大切だ。

とりわけ、まったく愛していないときには。

おお、ジプシー！

あらゆるものが愛だ。

愛だ。

間。

思うに、きみは愛しているふりをしながらでしか

愛することができないのだね。

おお、ジプシー！

きみは、こう理解する。

本当のことを言っているはずなのに

しゃべっているうちに

なんだか嘘をまじえてしゃべっているような気がするのだね。

嘘を言っていると

ほんとうのことを言っているような気に

木に

きみになってしまいうような気に

木に

きみに

なってしまうような

きみに

なるのだろう。

それはなぜだろう？

交換する。

転移させることに意味はない。

交換する。

転移させることに意味はない。

少なくとも、わたしは意味を与えない。

イメージさえも。

あるものとしたら

その転移が、わたしの感性を微弱に変化させるだけだろう。

わたしの感性にどう影響するか。

それを自覚することはきわめて難しいだろう。

交換する。

転移ではない。

時間が超スピードで過ぎていく箱がある。

ぼくはそこに、ハイインリヒの夢のなかに現われた青い花を置いてみる。(プツ。)

時間が超スピードで過ぎていく箱がある。

ぼくはそこに、これまでぼくが書いてきたたくさんのぼくを置いてみる。(プツ。)

時間が超スピードで過ぎていく箱がある。

ぼくはそこに、等比級数的に増加していくうんこを置いてみる。(ププツ、ププツ。)

時間が超スピードで過ぎていく箱がある。

ぼくはそこに、さつきテレビで見たベネチアの美しい街並みを置いてみる。(フウム。)

時間が超スピードで過ぎていく箱がある。

ぼくはそこに、人間を置いてみる。(もちろん、あらゆるすべての人間を、プフツ。)

時間が超スピードで過ぎていく箱がある。

ぼくはそこに、時間を置いてみる。(時間というもののそのものを、ね。ブッフッフ。)
時間が超スピードで過ぎていく箱がある。

ぼくはそこに、ひとつの波を置いてみる。(これって、リリカルでしょ？ フニツ。)
時間が超スピードで過ぎていく箱がある。

ぼくはそこに、かつてぼくを傷つけたひとつの言葉を置いてみる。(フフンツ、ダー。)
道を歩いていて

通りの向こうからやってくる人を

(女性だった。)

車道をはさんだ、向こう側の道に置いてみる。

目のなかで、そうなることをイメージする。

うつすらだが、反対側の道から、その人がやってくるのが見える。

しかし、こちら側の道でも、

向こうの方から歩いてくるその人の姿が目に見える。

そこで、今度は、その二人を交換する。

二人の映像は、多少濃淡の違いがあったのだけれど

交換すると、その違いが少なくなった。

そこでさらに、二人の姿を交換する。

二人が近づいてくる。

交換する。

二人が近づいてくる。

こちらの人をあちらに

あちらの人をこちらに

交換する。

スピードをあげて

交換する。

二人は、ぼくにどんどん近づいてくる。

ぼくは二人にすれ違った。

ぼくも二人いたのだ。(ブフツ。)

二人は近づいてくる。

どんどん、ぼくに近づいてくる。

反対側の道にいる人をこちらに置いて

こちらの側にいる人を反対側に置こうとしたら

反対側にいて、ぼくがこちら側に置いた人の方が消えてしまった。

二人は近づいてくる。

近づいてくる。

どんどん近づいてくる。

すると、ぼくの傍らを二人が通りすぎた。

通り過ぎていった。

ぼくとすれ違って。

道はひとつじゃなかったけど

二つに分かれて

また一つになって

二人に分かれて

またひとりになって

ぼくたちはすれ違ってしまった。

反対側の道の向こうには、ぼくの後姿が見えた。

振り返ると、その人は二人いて

前を見ると

反対側の道とこちら側の道の上に

ぼくから遠ざかるぼくの後姿があつて

ぼくは、ぼくとすれ違う

たくさんの人たちのことを思った。

時間が超スピードで過ぎていく箱がある。

ぼくは、ぼくとすれ違う

たくさんの人たちのことを考えた。

記憶が

蝶の翅のように

ひらいたり。

とじたりする。

そのスピードはゆっくり。

蝶は

記憶を

ひらいたり、とじたり。

違った。

いや、違わない。

わたしは

翅をひらいたり、とじたりして

記憶を呼び覚ます。

アー・ユー・クレイジー・ナウ？

ぼくは救急車になりたかった。

あ、違う。

救急隊員に。(プフッ。)

あ、違わくない？

うん？

まっ、どっちでもいいや。

プフッ。

交換する。

交歓する。

交感する。

こご感ずる。

こご感ずる。

パパがママを食卓で食べてる光景。

フアレル。

ぼくはきみを傷つけたりなんかしないよ。

たとえきみが、ぼくに傷つけられたいと望んでも。

ただ一つの言葉、たった一つの単語が

長い文章に、複雑で遠大な意味を与える。

海に落とされた一滴のぶどう酒と同じように。(ってか、プフツ。)

パパとママの首を交換する。

90歳になったら選べるの。

そのまま人間の姿で、あと1年過ごすか

犬の姿となって〇〇年生きるか。

だったら、どうする？

パパとママが戻ってきた。

戻ってきたパパとママは

ぼくがミルクを入れておいたミルク皿に顔を突っ込むようにして
ミルクを飲んだ。

ひとつのミルク皿にはいったミルクを

パパとママは同時に飲もうとして

頭と頭をゴツツンコ。

わわんわんわん、わわんわん

だつて。(プフツ。)

朝霧をこぶしに集め

樹は、わたしの顔の上にしずくをもたらす。

水滴は、わたしの顔面ではね、地面にこぼれた。

雨は、と父は言った。

地面に吸われ

地面はまた太陽に温められ

水蒸気を吐き出す。

こころとは地面のようなものであり、
思いとは、雨のようなものだ。
と。

わたしが死んでも、その場所はあり
その場所に雨は降るのだ、と。

フォロー・ミー。

ファレル。

イフ・ユ・ワナ・ビ・ゼア・・・

水蒸気は塵や埃を核として凝集して水滴となる。

水滴は水滴と合わさって

雨となる。

思いもまた、なにかを核として

(それは感覚器官がもたらすものであったり

無意識の領域で息をひそめていたなにかであろう。)

はつきりとした形を取ったものであろう。

そのはつきりとした形にさせるもの

法則のようなものがロゴスであり

そして、そのはつきりとした形を取らせる前のものも

そのはつきりとした形にあらわれたものも

ロゴスに寄与するのだから、区別が難しい。

ゆえに、それらのものも、ロゴスと言わざるを得ない。

わたしが死んでも、その場所はある

その場所に雨は降るのだ。

と。

パパ。

絵になる病気がはやってた。

最初はやせていくので喜んでいた人もいた。

どんなポーズで絵になるか考えた人たちもいた。

どんな格好で絵になるか気にしない人もいた。

しかし、突然、絵になるので、どんなにポーズをとっても

その望んだポーズで絵になることは難しかった。

あとから、他の人の絵に加わる人もいた。

自分の親や子供の絵のそばで

恋人たちの絵のそばにいて

彼らの傍らでやせていく自分の姿を見ながら

自分の傍らで絵になった彼らの親や子供や恋人たちの絵を見つめながら

絵になっていく人もいたし

憎んでいる者のそばで

じっと絵になるのを待っている者もいた。

ものすごい形相をして。

しかし、あとから加わっても

もとの絵にしつくりくるものは少なかった。

絵のタッチがどれも異なるものだから

あとから加わるのは、あまりおすすめじゃなかった。

絵になる病気。

これって、これまで画家たちが

多くの人間を絵のなかに閉じ込めてきた

絵の復讐？

絵のなかの人物たちの生身の人間に対する復讐なのかしら？
ぼくもとうとう絵になるらしかった。

最初は、ぼくもおなかへっこんでよろこんでたんだけど。
うううん。

ファーザー？

ぼくは、どんなポーズをとろう？

とったらいい？

ま、どんなポーズでもいいけどね。

ああ、あとどれぐらいしたら、絵は、ぼくになるんだろう？
てか。

あつ、

ファーザー。

ぷくぷくちやかぱ。

てか。

あつ、

ファーザー。

ぶくぶくちやかば。

てか。

あつ、

あつ、

あつ、

あつ、きたわ。

きたわー。

ひさしぶりに、きたわあ。

頭にきたのよお。

なんで、わたしが謝らなきゃなんないわけ？

それに、なによ。

あのやり方。

直接言いなさい。

直接！

投稿者の詩を使って

わたしのことを貶めるなんて、さうとう陰険な手口だわ。

どうせ、するんだったら、もっと陰湿にしなさい。

陰湿に。

まあ、もともとなんだから

あんまりたくさん要求しないけどね。

あんたたち、

自分たちより才能のある書き手を選べば

自分たちの才能のなさが世間に知られるからって

自分たちより才能のない書き手ばかり選ぶのは

もういい加減になさい！

バレバレなのよ。

あんたたちのつままない詩よりつままないんだから

そうとうつままないでしょ？（プフツ。）

そんなわけで、もう耐えられませんか。

いつも被害を受けるのは、わたしの方ばかり。このまま

やってきたことに対して、たいした評価もあるわけではないのですが、

これもオリンピック開催国の事情によると思います。

テロの予告も日増しに

苦情の多くが役所に寄せられて困っています。

人工肛門・マダガスカル之夜は

苦情の多くが役所に寄せられて困っています。

人工肛門・マダガスカル之夜は

苦情の多くが役所に寄せられて困っています。

おとつい。

おっと、つい。

お。

違う派。

あ、違うわ。

ちよつと前ね。

おとつい、って言葉が好きなの。

うろううん。

考えごとをしながら歩いてると

車に轢かれそうになって

この感じ、この感じ、この感
書けないわ。
ひとりでは。

にっこりしぼんで、しぼって、しおれて、しおって、
でも、運転手がバカだから
ぼくを轢かないで

(ワードでなかったら、こんな字、ぜったいに書かないわ。ブヒッ。)
この感じ、この感じ、この感じよおおおおおおお！
前を歩いてた男の子を

轢いちゃったの
よおおおおおおおおおおおおお！

この感じ、この感じ、この感じよおおおおおお！
ぼくの目の外では

その子は、ヘンな音を立てて
道路に、べちゃ。

ぼくの目の中では

その子は脚のない木のいすのように立ちすくんで
ギョギョ音を立てて
バタン。

苦情の多くが役所に寄せられて困っています。

人工肛門の夜・マダガスカル之夜は

木になって

気になって

木になって

しかたがなかった。

人工肛門・マダガスカル之夜は

ピン札。

言葉は言葉の上に

言葉をつくり

言葉は言葉の下に

言葉をつくる。

ゆきちちゃん、ありがとう。

いつまでも。

ぼくといっしょにいてね。

(プツ)

もう二十年近く、数学を教えてるの

って、ぼくが言うと

たいていの詩人は

へえ、って言うけど

数学って、へえ、って言われる科目なのか？

あるいは、わたしも昔は数学が得意だったんですよって、

いかにも、嘘ついてますって、ふふん、ぼくにはわかるよん。

(ぶっ。)

まあ、得意でも苦手でもいいんだけど

それにしても

みんな、得意か、苦手か

どちらかしかなくって

どちらかしかないのか、おまえら。

興味深い。

わたしの苦い舌が、わたしの悲しみにまばたきするとき

その悲しみの味わいに、下半身・不完全勃起、死ね、死ね、死ね、死ね！
スターシップとハイキング。

(読んだことある?)

ぼくのなれそめ。

宇宙船片手に

ホームステイ。

人工肛門・マダガスカル之夜は

苦情の多くが役所に寄せられて困っています。

精神とは

精神の働きを意味する。

あるものに精神があるというのは

対象とするものがあって、

それを知覚し、

そこからなにかを統合する作用が起こるということであって

となとなとなとな得るをるざわ言と

そこからなにものかを統合する作用が起こらない場合
それには精神の働きがない
精神がない。

な

人工肛門・マダガスカル之夜は

苦情の多くが役所に寄せられて困っています。

ベイベエ。

それより面白いのは

ぼくは、数学は感覚的なものだと思っているので

しかもそれは、音を感性的に捉える力とつながりのあるものだとも思っている
ので
そう。

数学に対する感覚的なものと、音に対する感性的なものとの間には

なにか、ああ、密接なつながりがあると思っっているので

あー

。

あ、

そう。

陶酔間。

間？

缶。巻。観。冠。感。ね。

陶酔感。

イッパツで出ろっちゅうねん。

あ。

あの子は、どうしてるだろ。

ヘンな音立てた

あの子。

ベスト。

ぼくがいままで見た子のなかで
いちばんかわいい後ろ姿してた
あの子。

太い太ももが（細い太ももって、書くとヘンね。書いてないけど。）
おっきなお尻と

いい音楽が流れてた。

詩には音楽があつて
あ。

言葉には、音楽があつて、

でも、きつと

数学が苦手なひとって、音楽もわかんないんだろうな。

詩の音の構造に対して言及されることはほとんどない。

音ではない。

音の構造である。

短い詩行のではない。

詩句のではない。

四行や

六行や

八行や

十二行や

十四行なんかの構造ではない。

数ページにわたる音の構造に対するものだ。

十数ページにわたる音の構造に対するものだ。

数十ページにわたる音の構造に対するものだ。

(あとの二行は、メントくさいから、コピーして貼っつけてつくったのよん。

もちろん、コピーして貼っつけてつくったのは、ここだけじゃないわ。

わたしのこの詩は、コピー貼っつけまくって、つくってんのよ。プフッ。)

なんで、おんちなヤツが数学をしてるんよ。

あ、違った。(もちろん、ワザとよおん。)

なんで、数学のできひんもんが詩を書いてるんよ。(もちろん、ワザとよおん。)

できひんもんはできひんのよ。(もちろん、ワザとよおん。)

嘘ついてもわかるかね。(もちろん、ワザとよおん。)

詩の音の構造に対してきわめて敏感なほくの耳は(もちろん、ワザとよおん。)

意味の構造に対しても、きわめて敏感でね。(もちろん、ワザとよおん。)

嘘ついてても、すぐわかんだぞ。(もちろん、ワザとよおん。)

意味の構造に対して敏感だと思ってる詩人のなかに

音の構造に対して敏感な者がどれぐらいの割合でいるのか。

たぶん、ほとんどいない。

情けないわ。

情けないわ。

(こっちは、コピーじゃないのよおん。)

情けないわあ。

ああ、

なんで。

なんで。

なんで。

いつも

苦情の多くが役所に寄せられて困っています。

人工肛門・マダガスカルの夜は

ぼくのほほに

燃えるくちづけ。

なぜ、産むものより

生まれるものの方が先に生まれてきたのか？

ぼくのために

ただひとりきり

ぼくひとりきりのためだけに

ヘンな音立てた

あの子。

風景の伝染病。

ゴホン、ゴホン。

ある日、風景が咳をひとつ、ふたつ。

ゴホン、ゴホン。

そしたら、そばの風景も

ゴホン、ゴホン。

咳をしだした。

そしたら、そばにある風景が

最初に咳をした風景に似てきて

ゴホン、ゴホン。

咳がひどくなつて

とうとうそっくり

瓜二つになつて

同じ風景がふたつ。

みつつ。

ゴホン、ゴホンとするたびに

同じ風景がよつつ、いつつ。

ゴホン、ゴホン。

むつつ、ななつ、と。

風景の伝染病が広がって

とうとう、すべての風景が

たつたひとつの風景になりましたとき。

(あれ、たくさんの同じ風景じゃないの?)

細かいことは言わんでよろしい。(プフツ)

ゴホン、ゴホン。

ある日、ひとりの人が咳をひとつ、ふたつ。

ゴホン、ゴホン。

そしたら、そばの人も

ゴホン、ゴホン。

咳をしだした。

そしたら、そばにいる人が

最初に咳をした人に似てきて

ゴホン、ゴホン。

咳がひどくなつて

とうとうそつくり

瓜二つになつて

同じ人が二人。

三人。

ゴホン、ゴホンとするたびに

同じ人が四人、五人。

ゴホン、ゴホン。

六人、七人、と。

ある人の伝染病が広がって

とうとう、すべての人が

たったひとりの人になりましたとき。

(あれ、たくさんの同じ人じゃないの?)

細かいことは言わんでよろしい。(プフッ)

ゴホン、ゴホン。

ある日、ひとつの音が咳をひとつ、ふたつ。

ゴホン、ゴホン

そしたら、そばの音も

ゴホン、ゴホン。

咳をしだした。

そしたら、そばにあつた音が

最初に咳をした音に似てきて

ゴホン、ゴホン。

咳がひどくなつて

とうとうそつくり

瓜二つになって

同じ音がふたつ。

みつつ。

ゴホン、ゴホンとするたびに

同じ音がよつつ、いつつ。

ゴホン、ゴホン。

むつつ、ななつ、と。

ある音の伝染病が広がって

とうとう、すべての音が

たったひとつの音になりましたとさ。

(あれ、たくさんの同じ音じゃないの?)

細かいことは言わんでよろしい。(プフツ)

ぶくぶくちやかば。

ぶくぶくちやかば。

ぶくくとくぶく。

ゴホン、ゴホン。

そしたら、そばの言葉も

ゴホン、ゴホン。

咳をしたら。

そしたら、そばにあった言葉が
最初に咳をした言葉に似てきて

ゴホン、ゴホン。

咳がひどくなつて

とうとうそっくり

瓜二つになつて

同じ言葉がふたつ。

みつつ。

ゴホン、ゴホンとするたびに

同じ言葉がよつつ、いつつ。

ゴホン、ゴホン。

むつつ、ななつ、と。

ある言葉の伝染病が広がって

とうとう、すべての言葉が

たったひとつの言葉になりましたとさ。

(あれ、たくさんの同じ言葉じゃないの?)

細かいことは言わんでよろしい。(プフツ)

ゴホン、ゴホン。

ある日、ひとつの意味が咳をひとつ、ふたつ。

ゴホン、ゴホン。

そしたら、そばの意味も

ゴホン、ゴホン。

咳をしだした。

そしたら、そばにあった意味が

最初に咳をした意味に似てきて

ゴホン、ゴホン。

咳がひどくなつて

とうとうそっくり

瓜二つになつて

同じ意味がふたつ。

みつつ。

ゴホン、ゴホンとするたびに

同じ意味がよつつ、いつつ。

ゴホン、ゴホン。

むつつ、ななつ、と。

ある意味の伝染病が広がつて

とうとう、すべての意味が

たつたひとつの意味になりましたとき。

(あれ、たくさんの同じ意味じゃないの?)

細かいことは言わんでよろしい。(プフツ)

ゴホン、ゴホン。

ある日、ぼくが咳をひとつ、ふたつ。

ゴホン、ゴホン。

そしたら、そばにいた人も

ゴホン、ゴホン。

咳をしだした。

そしたら、そばにいた人が

最初に咳をしたぼくに似てきて

ゴホン、ゴホン。

咳がひどくなつて

とうとうそっくり

瓜二つになつて

同じぼくが二人。

三人。

ゴホン、ゴホンとするたびに

同じぼくが四人、五人。

ゴホン、ゴホン。

六人、七人、と。

ぼくの伝染病が広がって

とうとう、すべての人が

たったひとりのぼくになりましたとき。

(あれ、たくさんの同じぼくじゃないの?)

細かいことは言わんでよろしい。(プフツ。)

ゴホン、ゴホン。

ある日、ひとつの風景が咳をひとつ、ふたつ。

ゴホン、ゴホン。

そしたら、そばにいた人も

ゴホン、ゴホン。

咳を شدした。

そしたら、そばにあった音が

最初に咳をした風景に似てきて

ゴホン、ゴホン。

咳がひどくなつて

とうとうそつくり

瓜二つになつて

同じ言葉がふたつ。

みつつ。

ゴホン、ゴホンとするたびに
同じ言葉がよつつ、いつつ。

ゴホン、ゴホン。

むつつ、ななつ、と。

ある風景の伝染病が広がって

とうとう、すべての人が

たったひとつの音になりましたとき。

(あれ、たぐさんの同じぼくじゃないの?)

細かいことは言わんでよろしい。(プフッ)

ある日、ひとつの咳が咳をひとつ、ふたつ。

ゴホン、ゴホン。

そしたら、そばの咳も

ゴホン、ゴホン。

咳をいだした。

そしたら、そばにあった咳が

最初に咳をした咳に似てきて

ゴホン、ゴホン。

咳がひどくなつて

とうとうそつくり

瓜二つになつて

同じ咳がふたつ。

みつつ。

ゴホン、ゴホンとするたびに

同じ咳がよつつ、いつつ。

ゴホン、ゴホン。

むつつ、ななつ、と。

ある咳の伝染病が広がって

とうとう、すべての咳が

たつたひとつの咳になりましたとさ。

(あれ、たかさんの同じ咳じゃないの?)

細かいことは言わんでよろしい。(プフツ。)

きょうは、もうほとんど寝てた。

仕事帰りにミスド行って

ドーナッツ買って

はああ

くだらない。

ドーナッツの輪つかと、ミスドのウェイトレスの顔を交換する。

運んだトレイト、聞こえてくる50年代ポップスを交換する。

はああ

くだらない。

コーヒーは

なんだか薄いしい。

そのコーヒーカップのシンボルマークと、パパの記憶を交換する。

バレンチノ。

なんで。

はああ

くだらない。

違うカファに寄ろうかな。

チチチチチチ。

なんだ、これ。

ミルフィー。

ムフツ。

フフ。

ファレル。

ねえ、

ぼくのこと、愛してる？

ただ、ぼくたちは、クスクス笑って

きれいになる病気がはやってた。

ぼくは何年も前にかかって

ラジオで聞いて

知ってたけど

みんなは

ただ、ぼくたちは、くすくす笑って

まだたすかる。

まだたすかる。

そのしぼんだ花びらは、わたしのおぼだった。

淑女の成れの果てだ。

アニーホール。

腐りしぼんだ、花びら。

日曜日にかけて電話が土曜日につながる。

ボン・ボアーージュ！

ディア。

きみの瞳が写した、ぼくの叫び声は

まだたすかる。

まだたすかる。

タチケテー！

イヤン、途中で切れちゃったわ。

ファレル。

ぼくたちの間では

どんなことでも

起こったわけじゃない。

信じられないことしか起こらなかった。

いまでは信じられないような

すてきなことしか。

モア・ザン・デイス。

パパやママは

ばらばらになったり

またひとつになったりしながら

航海する。

後悔する。

公開する。

こう理解する。

こう理解する。

愛しているふりをすることは大切だ。

とりわけ、まったく愛してはいないときには。

おお、ジプシー！

あらゆるものが愛だ。

愛だ。

間。

思うに、きみは愛しているふりをしながらしか

愛することができないのだね。

おお、ジプシー！

きみは、こう理解する。

本当のことを言っているのに

しゃべっているうちに

嘘をまじえてしゃべっているように感じるのだね。

嘘を言っていると

ほんとうのことを言ってるような気に

木に

きみになってしまうような気に

木に

きみに

なってしまうような気がするだろう。

それはなぜだろう？

交換する。

転移させることに意味はない。

交換する。

転移することに意味はない。

少なくとも、わたしは意味を与えない。

イメージさえも。

あるものとしたら

その転移が、わたしの感性を微弱に変化させるだけだろう。

わたしの感性にどう影響するか。

それを自覚することはきわめて難しいだろう。

交換する。

転移ではない。

時間が超スピードで過ぎていく箱がある。

ぼくはそこに、一輪の花を置いてみる。(プッ。)

時間が超スピードで過ぎていく箱がある。

ぼくはそこに、ひとりのぼくを置いてみる。(プッ。)

時間が超スピードで過ぎていく箱がある。

ぼくはそこに、パパやママを置いてみる。(ププッ、ププッ。)

時間が超スピードで過ぎていく箱がある。

ぼくはそこに、ひとつの風景をおいてみる。(フウム。)

時間が超スピードで過ぎていく箱がある。

ぼくはそこに、人間を置いてみる。(だれでもない人間を、プフッ。)

時間が超スピードで過ぎていく箱がある。

ぼくはそこに、ひとつの音を置いてみる。(フニッ。)

時間が超スピードで過ぎていく箱がある。

ぼくはそこに、一つの言葉を置いてみる。(フニフニフニャーラ。)

道を歩いていて

とおりの向こうからやってくる人を

(女性だった。)

車道をはさんだ、向こう側の道に置いてみる。

目のなかで、そうなることをイメージする。

うっすらだが、反対側の道から、その人がやってくるのが見える。

しかし、こちら側の道でも、向こうの方から歩いてくるその人の姿が目に見える。

そこで、今度は、その二人を交換する。

二人の映像は、多少濃淡の違いがあったのだけれど

交換すると、その違いが少なくなつた。

そこでさらに、二人の姿を交換する。

二人が近づいてくる。

交換する。

二人が近づいてくる。

こちらの人をあちらに

あちらの人をこちらに

交換する。

スピードをあげて

交換する。

二人は、ぼくにどんどん近づいてくる。

ぼくは二人にすれ違った。

ぼくも二人いたのだ。(ブフツ。)

二人は近づいてくる。

どんどん、ぼくに近づいてくる。

反対側の道にいる人をこちらに置いて

こちらの側にいる人を反対側に置こうとしたら

反対側において、ぼくがこちら側に置いた人の方が

消えてしまった。

二人は近づいてくる。

近づいてくる。

どんどん近づいてくる。

すると、ぼくの傍らを二人が通りすぎた。

通り過ぎていった。

ぼくとすれ違って。

道はひとつじゃなかったけど

二つに分かれて

また一つになって

二人に分かれて

またひとりになって

ぼくたちはすれ違ってしまった。

反対側の道の向こうには、ぼくの後姿が見えた。

振り返ると、その人は二人いて

前を見ると

反対側の道とこちら側の道の上に

ぼくから遠ざかるぼくの後姿があつて

ぼくは、ぼくとすれ違ふ

たくさんの人たちのことを思った。

時間が超スピードで過ぎていく箱がある。

ぼくは、ぼくとすれ違ふ

たくさんの人たちのことを考えた。

記憶が

蝶の翅のように

ひらいたり

とじたりする。

そのスピードはゆっくり。

蝶は

記憶を

ひらいたり、とじたり。

違った。

いや、違わない。

わたしは

翅をひらいたり、とじたりして

記憶を呼び覚ます。

アー・ユー・クレイジー・ナウ？

ぼくは救急車になりたかった。

あ、違う。

救急隊員に。(プフッ。)

あ、違うくない？

うん？

まっ、どっちでもいいや。

プフッ。

交換する。

交歓する。

交感する。

こご感ずる。

こご感ずる？

パパがママを食卓で食べてる光景。

フアレル。

ぼくはきみを傷つけたりなんかしないよ。

たとえきみが傷つけられたいと望んでも。

ひとつの単語、ただ一つの言葉が

長い文章に、複雑で遠大な意味を与える。

海に落とされた一滴のぶどう酒とは違って？

パパとママの首を交換する。

3歳になったら選べるの。

そのまま人間の姿で、あと一年過ごすか

犬の姿となつて3年生きるか。

だったら、どうする？

パパとママが戻ってきた。

戻ってきたパパとママは

ぼくがミルクを入れておいたミルク皿に顔を突っ込むようにして

ミルクを飲んだ。

ひとつのミルク皿にはいったミルクを

パパとママは同時に飲もうとして

頭と頭をゴツツンコ。

わわんわん、わわんわん

だつて。(プフッ。)

朝霧をこぶしに集め

樹は、わたしの顔の上にしづくをもたらす。

水滴は、わたしの顔面ではね、地面にこぼたれた。

雨は、と父は言った。

地面に吸われ

地面はまた太陽に温められ

水蒸気を吐き出す。

こころとは地面のようなものであり、

思いとは、雨のようなものだ。

と。

わたしが死んでも、その場所はある

その場所に雨は降るのだ、と。

フォロー・ミー。

ファレル。

イフ・ユ・ワナ・ビ・ゼア・・・

水蒸気は塵や埃を核として凝集して水滴となる。

水滴は水滴と合わさって

雨となる。

思いもまた、なにかを核として（それは感覚器官がもたらすものであったり無意識の領域で息をひそめていたなにかであるかであろう。）はつきりとした形を取ったものであろう。

そのはつきりとした形にさせるもの

法則のようなものがロゴスであり

そして、そのはつきりとした形を取らせる前のものも

そのはつきりとした形にあらわれたものも

ロゴスに寄与するのだから、区別が難しい。

ゆえに、それらのものも、ロゴスといわざるを得ない。

わたしが死んでも、その場所はある

その場所に雨は降るのだ。

と。

パパ。

絵になる病気がはやってた。

最初はやせていくので喜んでいた人もいた。

どんなポーズで絵になるか考えた人たちもいた。

どんな格好で絵になるか気にしない人もいた。

しかし、突然、絵になるので、どんなにポーズをとっても

その望んだポーズで絵になることは難しかった。

あとから、他の人の絵に加わる人もいた。

自分の親や子供の絵のそばで

恋人たちの絵のそばにいて

彼らの傍らでやせていく自分の姿を見ながら

自分の傍らで絵になった彼らの親や子供や恋人たちの絵を見つめながら

絵になっていく人もいたし

憎んでいる者のそばで

じっと絵になるのを待っている者もいた。

ものすごい形相をして。

しかし、あとから加わっても

もとの絵にしっくりくるものは少なかった。

絵のタッチがどれも異なるものだから

あとから加わるのは、あまりおすすすめじゃなかった。

絵になる病気。

これって、これまで画家たちが

多くの人間を絵のなかに閉じ込めてきた

絵の復讐？

絵のなかの人物たちの生身の人間に対する復讐なのかしら？

ぼくもとうとう絵になるらしかった。

最初は、ぼくもおおながへっこんでよろこんでたんだけど。

うううん。

ファーザー？

ぼくは、どんなポーズをとろう？

とっただいいい？

ま、どんな

ポーズでもいいけどね。

あとどれぐらいで、ぼくも絵になるんだろう？

あ

ファーザー。

ぶくぶくちやかば。

人工肛門・マダガスカルの夜は

きたわ。

きたわ。

ひさしぶりに、きたわ。

頭にきたのよ。

なんで、わたしが謝らなきゃなんないわけ？

それに、なによ。

あのやり方。

直接言いなさい。

直接！（プツ、バカね。）

そんなわけで、もう耐えられません。

いつも被害を受けるのは、わたしの方ばかり。このまま

やってきたことに対して、たいした評価もあるわけではないのですが、

これもオリンピック開催国の事情によると思います。

テロの予告も日増しに

苦情の多くが役所に寄せられて困っています。

人工肛門・マダガスカル之夜は

苦情の多くが役所に寄せられて困っています。

人工肛門・マダガスカル之夜は

苦情の多くが役所に寄せられて困っています。

おとつい。

おっと、つい。

お。

違う派。

あ、違うわ。

ちよっと前ね。

おとつい、って言葉が好きなの。

うろううん。

考えごとをしながら歩いてると

車に轢かれそうになって

この感じ、この感じ、この感じ

書けないわ。

ひとりでは。

にっこりしぼんで、しぼって、しおれて、しおって

でも、運転手がバカだから

ぼくを轆かないで

この感じ、この感じ、この感じよおおおおおおお！

前を歩いてた男の子を

轆いちゃったのよ。

よおおおおおおおおお！

この感じ、この感じ、この感じよおおおおお！

ぼくの目の外では

その子は、へんな音を立てて

道路に、べちゃ。

ぼくの目の中では

その子は脚のない木のいすのように立ちすくんで

ギョギョ音を立てて

バタン。

苦情の多くが役所に寄せられて困っています。

人工肛門の夜・マダガスカル之夜は

木になって

木になって

気になって

しかたがなかった。

人工肛門・マダガスカル之夜は

ピン札。

言葉は言葉の上に

言葉をつくり

言葉は言葉の下に

言葉をつくる。

ゆきちちゃん、ありがとう。

いつまでも。

ぼくといっしょにいてね。

(プッ)

もう二十年近く、数学を教えるの

って、ぼくが言うと

たいていの詩人は

へえ、って言うけど

数学って、へえ、って言われる科目なのか？

あるいは、わたしも昔は数学が得意だったんですけど、

いかにも、嘘ついてますって、ぼくにはわかるよん。

(ぶっ。)

まあ、得意でも苦手でもいいんだけど

それにしても

みんな、得意か、苦手か

どちらかしかなくって

どとらかしかないのか、おまえら。

興味深い。

わたしの苦い舌が悲しみにまばたきするとき

あの悲しみの味わいに、下半身・完全隆起。

スターシップと悲しみ。

ぼくのなれそめ。

宇宙船片手に

ホームステイ。

人工肛門・マダガスカル之夜は

苦情の多くが役所に寄せられて困っています。

精神とは

精神の働きを意味する。

あるものに精神があるとは

対象とするものがあっても、

それを知覚し、

そこからなにごとかを統合する作用が起こらなければ

それには精神が働いてるとは見做せないのであって

それには精神の働きのない

精神がない。

と 言 わ ざ る を 得 な な な な な
人工肛門・マダガスカル之夜は
苦情の多くが役所に寄せられて困っています。
ベイベエ。
それより面白いのは

ぼくは、数学は感覚的なものだと思っているので
そかも、それは、音とつながりのあるものだと思っているので
そう。

数学に対する感覚名ものと、音に対する感覚的なものには
なにか、密接なつながりがあると思っているので
そう。

陶酔間。

間？

缶。

巻。

観。

冠。

感。

ね。

陶酔感。

イッパツで出ろっちゅうねん。

あ。

あの子は、どうしてるだろ。

へんな音立てた

あの子。

ベスト。

ぼくがいままで見た子のなかで

いちばんかわいい後ろ姿してた。

あの子。

太い太ももが（細い太ももって、書くとヘンね。書いてないけど。）

おっきなお尻と

いい音楽が流れてた。

詩には音楽があって

あ。

言葉には、音楽があって、

でも、きつと

数学が苦手なひとって、音楽もわかんないんだろうな。

詩の音の構造に対して言及されることはほとんどない。
音ではない。

音の構造である。

短い詩行ではない。

詩句ではない。

四行や

六行や

八行や

十二行なんかの構造ではない。

数ページにわたる音の構造に対するものだ。

なんで、おんちなヤツが吸うがあくをしてるんよ。

あ、違った。

なんで、数学のできんもんが詩を書いてるんよ。

できんもんはできんのよ。

嘘ついてもわかるからね。

詩の音の構造に対してきわめて敏感なぼくの耳は

意味の構造に対してもきわめて鋭敏な頭脳とも仲がよくってね。

嘘ついても、すぐわかんたぞ。

意味の構造に対して敏感だと思ってる詩人に

音の構造に敏感なものがどれぐらいの割合でいるのか。

たぶん、ほとんどいない。

情けないわ。

なんで。

なんで。

なんで。

いつも

苦情の多くが役所に寄せられて困っています。

人工肛門・マダガスカル駆るの夜は

ぼくのほほに

燃えるくちづけ。

なぜ、産むものより

生まれるものの方が先に生まれてきたのか？

ぼくのため
ぼくのため
へんな音
たてた
あの子。

深川忘年会始末

——解醒子飲食番外

倉田良成

詩の秘密統一会派『林』^{りん}の忘年会が深川の居酒屋「山利喜」で、暮れも押し詰まった26日の夜陰にまぎれ、ひそかにおこなわれた。メンバーは後藤美和子、駿河昌樹、倉田良成、倉田妻の四人。

まずビールで乾杯のあと、倉田が全員に名物の「モツ煮込み煮卵入り」を食べと敵命を下す。ふつつつと音を立てる煮込みの厚皿が一人一皿あてやって来て、箸を付けると皆驚嘆の表情を浮かべる。駿河はのちにこれをお代わりすることになる。煮卵も付けてということだから、この人は普段からよっぽどカラダに悪いものに飢えているらしい。

次に頼んだコハダの酢は、これも倉田のお奨めだが余しては勿体ないので二人前と少々遠慮したら、これをまた後藤がかかえこんで放さない。銘酒「神亀」の大徳利が来て、それをちびちびやりながらますます放さない。彼女は実はビールが苦手で、酢が大好き、日本酒が大好きということが判明した。このコハダは以前は甘酢だったが、今夜

のは恐らくは昆布だしの利いた旨味のある塩味。小憎らしいほどぬる爛の辛口に合う。

焼きとんも名物なのでレバーとハツとカシラを頼んだ。じゅうぶんに新鮮なのに焼き物の串を前に倉田妻がなぜか手を出さない。どうしたのかと思ったら、飲み物もないのに肴は摘めないという。神亀二合大徳利はたちまち消えていた。これはひとり後藤のせいばかりではなく、倉田妻も負けず劣らず間断なくちびちびちびちびやっていたのだ。

また一本を注文して、駿河と倉田が話す。思うに、むかしはそんなに大勢ではなかった詩を書く人間が、倉田も含めどうかすると精神病院のたぐいのお世話になることがままあったけれど、現在は（若い人に多いけれど）そういった病気に悩まされている人間がすぎるものとして、以前とは比較にならないくらい広汎な形で詩が書かれ、発表され、特にウェブサイトにあふれているのが見られるのはどうしたわけか。彼らに見られるほとんど絶対的ともいえる寂寥感、孤独感。こういう世界ではまた違った、逆説的な意味で、詩が「実利」に近づいているのか。

さらに一本を注文する。ついでにヒラメ造りと豆腐よう。造りにはエンガワとキモ・卵巣・皮の湯引きが付いている。湯がいただけで味は付けていないはずなのに、ぜんぶが甘い。もう一本追加して、倉田妻の酒がまた消えている。駿河は、まず酒がなくても肴を摘み、しかるのちその純粋なイデーでもって後から来る酒を飲んで味わうのが、究

極的な酒と肴の在り方だと屁理屈を言うが、その言に大いに納得してしまうのが倉田妻の変わったところか。もつとも駿河は馬鹿にされていたのかもしれない。

また一本追加。野菜盛り合わせを頼むが、紫タマネギとナチュラルチーズ（結構臭い）を挟んだアンディーブ、若ラツキョウにキュウリという面子が盛られていて、それを八丁味噌の焼き味噌でいただくというもの。この焼き味噌は自体が香ばしくて、後藤はついにこれをまるまる平定した。ちびりちびりやりながら。彼女と駿河は大学の教員だが、年末に策定する授業計画と思しきシユラバスというやつに悩まされているようだ。じゃあ年末はいつもシユラバですねと倉田が言ったら、駿河は大いに喜んでいたようだが後藤は氷のようなまなざしで倉田を一瞥したきりであった。

閉店時間が来たのでおつもりとなった。『林』の定期朗読会をやるうじやないか、という話をいつのまにかしつつ外へ出て、寒風つもの清澄通りを渡った。何か演歌でも唸ったらしい。うちでならいいけど、おもてで大声で歌うのは自分の父親みたいだからそれだけはお願いだからやめて、という妻の声で我に返った。駅でみんなと別れて電車に乗って家に帰り、それから一杯やって寝た。

深川の煮込みやさらし葱の色

解醒子

トンボ鉛筆株式会社へのクレーム

有働薫

鉛筆の硬さが気になりはじめると

何本替えてみても

硬すぎる

鉛筆立てから鉛筆をつぎつぎに引抜いて左端の硬度のマークを読むのだがいつまでたっ

てもこれでよさそうだと思える鉛筆には出会えない

まあましかなと思える鉛筆で書き始めるとなんとタツチの硬いこと御飯に混じった小石を噛んでしまったときのような生臭い、くさい、辛い、違和感に打ちのめされるまるで不運な負けがこんでしまったギャンブラーの悔しさ情けなさ自己嫌悪死の恐怖計画的に生きようというけさのちかいの呪縛をのろいすべてを投げ出して居間のちやぶだいの下に潜って泣きわめきたい

ぶたれた猫みたいにいじけてじぶんの自尊心の傷をなめてやりながら

そのたてなおしにとりかかろうかどうか迷っているプライドの高いおねこさまね
こちゃんにやーちゃんにやーこもう御飯食べてやらないぞだれがなんといってもスー
パーでいちばん高いネコカン買ってきてもぜったいだめ！たべてやらない！でもどう
してもたべてほしい？じや鉛筆もってこい田じゃだめだ田でもだめ田あるかもって
こいトンボ鉛筆社長の小川さんお数奇屋風のご自宅の玄関あけてよ笹や竜のひげなん
かを植込んだ石庭のヒイラギお詫びにお抹茶一服立ててよおいしかったらゆるしてあ
げるこんな硬すぎるえんぴつ作ってることほんとに許せないけど
恐ろしい断念の後には甘美な自由があること知ってるから
えんぴつ硬すぎるけど…ゆ…る…し…て…あげる！

塀の上の首

三井喬子

塀の上に首が並んでいた。

老若男女のそれらの顔は、雨上がりのにぶい西日を受けて光っていたが、明らかに生きている者のそれではなかった。一様に目を見ひらき、口をほうつと開けて、家の中をのぞきこんでいた。

カーテンを引こうとして目に入った、塀の上の首。いずれも見知った者ばかりで、もはや人間の生気を失ってはいるものの、やはり誰彼と特定できるものだった。

かつてわたしが愛した彼ら。その顔をした首。薄く発熱したレースの薔薇の模様のように、整然とならんで、息を出来ないわたしを見つめてくる。異口同音に、抑揚の無い声でかたりかけてくる。

あれからどうしていたの

ちっとも顔を見せないから、みんなで会いにきたよ

ねえ、あれからどうしていたのさ

忘れていたとは言いいくいが、忘れていたのだった。彼らは「逝ってしまった人」だったから。

忘れた？

だったら、私たちはもう一度死ななくちゃならないね。

そうか

そうなのね

首たちは、順番にくるりと回って向こう側に落ちて行った。やっぱりね、と聞えたような気がする。西日が鈍く塀を照らしている。かつてわたしが愛した彼らの顔が、見えなくなった。

カーテンを引いて、暗くなった部屋で、大声で泣いた。忘れてしまった。長いこと現われないものだから、わたしだって、あなたたちの名前を思い出せないじゃないか。△▽▽

ミッドナイト談合

T I S A T O

深夜の 午前二時になったら

決まって現れる

彼女を 夜更かし番長一号と みんなは呼ぶ

そのうち 二号 三号 四号・・・と現れて

四角い箱の空間は密かに ことのほか賑わい

なじみの喫茶店に寄る感覚で

でも そこは寒くもないし歩いていく必要もない

いつ行っても誰かが居て 何かを喋っている

自分の好きな時間帯に 気分にかかせて

ふらりと 立ち寄れる場所

いまや 夜更かし部隊まで生まれて

ときに 昼間に覗くと

今日は起きられないかも shouldn't

と眩きながら

頑張りましょう！ なんて励ましあい

まるで ひとつテーブルにお菓子を載せて

コーヒーを飲みながら 隣同士で

肩肘ついて べらべらしゃべっているかのよう

でも本当は その空間は イン・ザ・ワールド

丸い地球儀の上で

夜更かし番長一号は 日本

二号は ドイツ

三号は マンハッタンで

四号は ソウル

五号はノルウエー・・・六号は・・・

国内では

マリモさんは 北海道で

オレンジさんは 中国地方

横浜や 千葉や 福岡や沖縄の人もいて

語るごとに少しずつ 私生活があらわになる

去ってしまうのも自由

加われば一員〔チーム〕なんて言われ

その内容は案外本音で ミッドナイトの掲示板

ハンドルネームだからこそ語れることも

それぞれの風穴が こんなふうにして開いてゆく

苦い舌の先が歯茎に触れる

水島英己

苦い舌の先が歯茎にさわる

クラリネットの

息が空と夜のしじまを吹くとき

放り投げられた一茎の根っこが

大地との別れをアンダンテで訴える

速さをアレグロと

遅さをプレストと

ことばはどんな哀しみもうたわない

一管のクラリネットが調子をもつためには

きみはたぶんバイオリン、その弦を思い出の堆積にして

引つかくことをしなければならぬ
私は なぜ とは訊かないで

繰り返すメロディ

苦い舌の先

舌の苦い幸

ああ 夜の時間をこんなに消尽して、音の丘に登る

聴くだけで触れないもの

苦い舌の先は菌莖にさわる

血の臭いが立ち上がる

硝煙のような

臭い

知っているだけの接続詞を言い募る

そして、しかし、また夏がやってくる

そして、しかし、また、だから、あるいは、これもまた口実ではないのか
この音楽の時間を夜のしじまに吊り上げる

そこに見えてくるもの

時間の残骸

横たわって泣く泣き声

57階の処刑台を登る死刑囚

知っているだけの接続詞を言い募る

コトバを覚えたばかりの幼児の姿

いる、いない、いる、いない、いる、いない、

存在と非存在はクラリネットのメロディに変換され

非在はしかし今見えている君の膝のようにセクシャルにうごめき

夏が来るのは冬が去るからであり、「去る」ことはただ見えないだけで

波打つように単純なリズムの頂でメロディが破壊され、

その粒子が「あらぬ」「非在」を「存在」に換え

君の膝はやがて、大きな泡立つ「非在」に成長し、

陽のあたる在所になり

いる、いない、

強迫に駆られた二人の幼児として遊ぶ夏の正午にいる

Because my bride

Is a pool of the wood, and

なぜなら私の花嫁は森の池だから、そして

「木の葉のなかでひるがえる風だけをほめたたえよ」と私に命じながら

bidding me praise nothing but the wind that flutters in the leaves

すべての時をかけ

すべての空間をわたって

愛したり、憎んだりする、この自我の傷と愚かさを

いつ私は知るか

the evening of life

人生の雨の夜、しかし淡い光を浴びて

As if in a diary

日記のなかでのように

私は過ぎたとき、むしろ生まれる前のなつかしい

きみの膝の奥に帰る、その膝の「非在」に抱かれるために

あいー

そして私は

しかし私は

また私は

あるいは私は

だから私は

そしてしかしまたあるいはだからもしくははともに

この時とその穴、この場とその穴

抜け道や蛇の道墮ちてゆく道眺めのいい道去り行く道怒った道を笑う道を探して

歩いてゆくしかない

メロディの頂でリズムが崩壊して

深い息でクラリネットが人間の苦しみを歌うかのよう

あるいは哀しむかのよう

夜のしじまを吹き上げては消える

そのあとにきみの手があり

その手は

やさしくきみの花嫁を

愛撫する

繰り返せ！幾たびも

舌の苦い先

苦い舌の幸い

深く恋して

富澤守治

あれからは長いときが過ぎ
そしていま

そのひとは

静かな面持ちで

言葉があるでもなく、言葉にするでもなく
私に、話してくれる

絶え間なく起きてきた悲しみを記憶に紛らわせたことを
悲しみが起きてはこないように
苦しくても、忘却のひとつ形として

傷つくばかりの時代の波もあった

些細な利害とためらいもあったようだ

歯に浮く言葉ばかりは、暴力的で

闇よりも人を刺す、社会

そこに愛はなく、自由は沈んで行ったと言う

その闇はただ騒がしく、決して暗黙のものではなかったのだ
それは私にとってもそう

思い出せば、その場所に別れがあった
飛び去る光線の岐路があった、別れ！

むかし

深く恋して

好きになったおんな

そのひとは

透き通る言葉で、いつも

語りあった

波が、くだける笑い声と

はかない言葉の打ち返し、それでも意味は深くあり

見つめ合った日々があつて

だからいま、唇は振るえ

こうして、ふたりはここに

そうだ、口角にあふれる言葉は並木道の建築物のように交代し

時代と登場人物たちも変える

過ちは多く、あふれた言葉は意味を失い

形なく

溶けていった、ただの象形の文字へと、味わいもなく

もちろん動物的な本能だけの恋心もあつた
私たち、ふたりの集いには高まりがあつた

どれほどか焦がれたのだろうか、涙も流れた

蒼き、蒼白の若き日々

あの悲しみは本物だった、深く恋した

若いころの、あのころの

恋人たち

豊かな官能と、白く長い柔毛（ニコゲ）に覆われた日々よ

歌声と抱擁

私がこの女（ヒト）と交す

恋に過去（アト）も未来（サキ）もあるまい

そうでなければならぬことへと恐れ

蘇る記憶は鮮やかに覚える
いまは！

百日紅

海埜今日子

くれないをかたったひといきれのなか、
風の夕映えがもとめら

れた。うけいれてはわかたれてゆく、親密さが落ちていたよう
な気がしたので、ふりかえるのをやめてみる。いない羽が長く
なり、くずれた雲がわたるのだった。いそぐ男がいれかわり、
たちかわり。きっかけがつぶさにながめられていた。物売りめ
いたにおいもまた、ひとけのなからたゆたってくる、とかん
じたのは錯覚でしたか？ 衣服のみだれをなおしながら、旅の
目的をなげだす女がいた。百日紅はあがなうようなまなざしで、
夏をとむらっていたんです。忘却にせきたてられ、嗅ぐように
して男を欲した。行方と方角がないまぜになり、接点のように

さそうから。夕暮れとは何時のことをさすのでしょうか。うごかない日々を日記にちりばめ、地図をひろげる女もいた。あて先不明のものがたりが、夜からぼっかりとうかびあがり、男たちをふるわせる。うしなつた重さのしかかり、ちがうわかれをはぐくんでいた。そめたようなまがまがしき、とある者は顔をそむけ、べつのある者は旅装をとく。日録はたそがれにおもむき、逢瀬をゆめ見ていたのかもしれない。地平線がここからではみえません、だから結末がわかりません、いえ、だれもあなたをせめはしないのです。だからどうか、どうか。さんざめく日没、肯定していたわけではなかったが。日々の出立、それが夕景の合図だった。ふりほどく、のではなく、すべるということ。重なることが越境なのだ、秋が彼らをはがしてゆく。鋭利さすれすれに、つかのまの胸がしなっていたのがもどかしい。雲へむけられたはじまりは、いつだって抱擁よりもたどたどしいから。ひとごみにともるように咲いていたのだと、案内人としての地図をしまい、息苦しさにたちかえる。男のよ

うにたぐる肌、そまらない息づかいもまた、たぶん。見送るに
おいを風がねがった。おわりの花が燃える地面だ。△▽

(初出：『coalsack』 55)

相聞・あいぎょこえ

桐田真輔・高田昭子

破線の抒情

桐田真輔

歳月は荷重を失い

つまさきだつ

概念の四季にあけくれた

唾棄された戦後の時軸を逃れ

武蔵野あたりを栖と定め

気儘な都会の西風に

おぼつかぬ生を流し

蹉跌には封印を

蹉嘆には気怠い階調を

そんな破線の抒情を踏み

花曇りの空を渡ってゆけば

温度計の目盛りは僅かにずれ

なだらかな変位に一日は果てて

空想でも事実でもない幻のうちに

聴えぬ響動（とよめ）きも熄むように思えた

春―叙情

高田昭子

遠いものばかり待っていたので

感受性の先端が

いつもつめたくて

つまさきだっていた。

凍えを解けば

むやみに花が咲く春の無節操に

温度計が少しづつ伸びてゆく不安に

ようやくこころが追いつくこともできる

夜気のゆるやかな呼吸音

花びらが開く　そして閉じる　あるいは萎む

樹の　幹の　枝の　葉脈を通過する水の音

虫の羽の蝶番のきしみ　羽と風の駆け引き

それらの気配に調和するとき

愛ではない　憎しみでもない

なにもものでもないものにいだかれて

静かに咲く春のいのちになれる？

*
*

桐田、高田による一対の詩は「相聞・あいぎんえ」という試みのなかから選びました。
その全作品はここにあります。

<http://www.haizara.net/~kiritata/takata/somon/index.html> 相聞（あいぎんえ）